

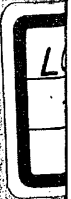
# 銀嶺

創刊号



埼玉銀行従業員組合

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20



L050-キ

1



巻頭言

執行委員長 大澤 二雄

この故にこそ進歩があり、友愛が生じる。われ／＼の組合運動も同志愛に結ばれて高きものに向つてのためみない前進を續けて来た。とりわけ文化運動に於ては、長い間あるひろこりを持つた偉大なものを求めて止まなかつた。

機關誌『銀嶺』は、われ／＼のこの念願が結實されたものであり、同時にその名はわれわれが希求して来た高い、美しい、大いなるものを絶へずわれ／＼に投げかけ、われ／＼を招くのである。

われ／＼はこれに應へよう。たとへ職場こそ違へ、又遠く離れ合つて居ても、銀嶺を眺め呼び掛ける気持は同じである。

われ／＼は『銀嶺』を通じて互に呼び交はし、主張し合ひ、われ／＼の言葉や論理をいつも自由に、眞しに、そして活潑に展開しよう。

われ／＼が高いもの、美しいもの、大いなるものを求めて『銀嶺』に呼びかけるとき、われ／＼の心は一つに結ばれ、ここにわれ／＼は心のふるさとを見出し、友愛の温床を發見するのである。

機關誌『銀嶺』が生れた。

われ／＼は『銀嶺』を團結のシンボルとして、われ／＼の手で、よりよい、より高い、より偉大なるものへの歿入が、眞にわれ／＼を幸福にする。

銀嶺……目次……創刊號



△表紙(題字)	森田(角)常務	三
△カット(大宮)	栗橋 榮一	一
巻頭言		二
銀嶺發刊に寄する		三
評論、研究		四
團結		五
労働組合の御用化を防げ		六
顧客と遊離した廣告はあり得ない		七
勤勞意欲について		八
銀行調査職能の意義		九
經營協議會制度の意義		一〇
生計の記録		一一
隨感		一二
そるばん		一三
秋刀魚		一四
幸福について		一五
悲境に泣く十銭札		一六
秋窓偶感		一七
木犀の想い出		一八

圓満な顔にならう		一九
坂田三吉とハツタリ		二〇
紀行		二一
初秋の乗鞍岳紀行		二二
三峯社まで		二三
詩、短歌		二四
俳句、川柳		二五
創作		二六
雨		二七
糧追ふ人々		二八
ありのままに		二九
朽		三〇
換		三一
思ひ出の手紙		三二
スポーツ		三三
行内野球大會記		三四
職場スポーツ野球		三五
大會寸描		三六
編輯後記		三七



## 銀嶺の發刊に寄する

書記長 野崎敏夫

労働組合が正しい方向に行く爲には正しい労働教育が必要である。そしてこの労働教育は労働者に對する労働問題の教育を主とすることは云うまでもないが、更に經營者一般公衆に對しても廣く行なはれるべきである。それら總ての人々が労働問題に深く理解をもつことによつて、はじめて目的が達せられる。労働組合の民主主義的発展は、正しい労働教育とそこから生ずるところの正しい勤勞觀念の徹底が基盤である。

我が國の労働組合は、敗戦に依つて與へられたものであり、自ら獲得したものでない爲に労働教育の徹底を欠き、徒らに鬭争のみに走り好む傾向はなからうか、さればこの労働教育の目的は第一に組合員の經濟的社會的地位の向上であり、その二は組合員の社會的地位の向上による社會全體の民主主義の向上という大きな意義をもたねばならない。

然らば労働教育は如何にして徹底すべきか、それには先ず諸外國の労働教育の實際をよく研究し、觀察しそれを學ぶことから始めることである。これは決して模倣を意味しない。日本本の労働教育に適合するよう又我々を完全な勤勞觀念の上に立たしめる研究を自ら學べばよいのである。組合は幹部又は指導者の一部のみでは民主的組合の發展もなくその目的も達し得ない。組合員相互が組合に對する認識を深め、その實態をつかむべきであり、それが爲には躊躇することなく組合活動の實態に入るべきである。

その實態は最も手近にある。自己の組合に對し觀察と研究を下すことこそその第一歩と言えよう。我々は活働の面に指導の面に感ずる何ものかがあることと思ふ。大いに批判と意見を加へることによつて組合の向上となり自己の教育の過程ともならう。その過程の一つとして私は銀嶺の發刊を喜ぶと共に、銀嶺の果す使命に大いなる期待を私は強くかけたい。



## 團 結

飯能支店 S・B 生

野球にチームワークの強固さが必要である如く銀行と云ふ社會に於ても、その發展の爲には絶対に此のチームワーク、いわゆる團結力が必要である事は云ふ迄もない。

人間は個人個人のそれ／＼異つた思想を持ち境遇を持つてゐる。それ等の異なる所から、何日しか不満の觀念が生じ、團結力にひびが入る事が往々にしてあるのである。我々は埼玉銀行に職を奉じ、此の銀行の仕事をする事に依り報酬を得生活をしてゐるのであつて見れば、より高い生活水準を得る爲には埼玉銀行の現在より

高い業績を作らなければならぬ。それにはやはり強固な行員全體の團結が基礎となるのである。各支店內或るいは課内の團結、銀行全體の團結、此處から輝かしい業績の記録は生ずるのである。では反面、何故團結を障害するひびが生ずるかを見る必要もある。恐らくその大部分は個人の中に起る他に對する不満の觀念からであらう。若し假りにある公正を欠く人事の發表があつたとする。その時その人事を受けた人に對する嫉妬と共に自分に對する不満の情は必ず銀行業務の上に於いて何かの形を以て現はれ十の業績が上る所を八或は七の業績のみ出來なかつたと云ふような結果を生ずる事であらう。それは人間の持つ微妙な心理の結果である。これは極めて小さな問題であるが、その小さな事の結果は相當大きなものを形成してしまふのである。であつて見れば決してゆるがせにすべき問題ではあるまい。

團結をする前提として『愛』と云ふ事がある

## 労働組合の 御用化を防ぐ

經理 課 武 田 興 一

人を愛する心。相互に敵意を抱いてゐたのでは離反するのみであつて到底團結する事は不可能である。人を愛すると云ふ事は簡單のようで難しい事であつて、人を愛するには先ず自分を正しく認識しなければならぬ。自己を正しく認識する爲には深い教養と思索とを必要とする。此の自己の正しい認識に依り、他人を認識し理解し「愛」が發生する。自分をよく知つたなら盲目的な言動はしないであらう又他人を信頼することも出来るし信頼されるのであつて、此處に融和が生じ強固な團結力を形成する事が出来る。今埼玉銀行の全行員がかくの如くして強固な團結によつて業務に邁進したなら九十億、百億の預金の数字も打ち建て、我々文化人としての高い生活水準も打ち建てられるであらう。私は最後に叫ぶ。共にじつかり手を握り合つて着々と此のユートピアに向つて進んで行こうと。

X X X X X X X X X X X X X X X X

私は汽車電車の中で銀行勞組の批判を屢々聞く。彼等批判者には銀行にストライキの起らぬのが不思議で堪らぬらしい。労働運動とはストライキのことなりと考へてゐるのではあるまいが、銀行勞組のおだやかなのに不思議がついてゐる。そして、銀行員共は何かうまいことをやっているのだらうと言つてゐる。——私は今日の變化した世相の中で銀行員位眞面目に仕事をしているものは少いと思つてゐる。統制經濟の行なはれる世の中で銀行員位昔の態度をくすさずサービスしてゐるものはあるまいとひそかに誇りを感じてゐる。

併し、事實は銀行員が決して他の事業場にして賃金が高かつたり、或はうまい汗を吸つて

やつてゐる譯ではなく、事業の性質上簡單にストライキが出来ないことを使用者側も労働者も十分承知している爲であると共に、銀行員はかかることに極めて保守的であるからに過ぎない。然も行員と重役との根本的性格の相違と云ふものが、他の事業に比べて極めて少ない。このことが労働騒ぎを少くしている原因と思ふが、このことが一面では組合を御用化する危険を十分に内蔵していることも否定出来ない。

現在の銀行に於て、組合を構成する組合員の資格をどの線で畫してゐるか、銀行によつて異なつてゐると思ふし、又地方によつて異なると思ふ方が多いのではないかと思ふ。若しそうであるならば、組合の爲に非常に危険であると思ふ。何故ならば、課長、支店長はもう一步で重役になる可能性がある。然も常に重役との交渉がある。かかる地位にあるものが、組合でどんな發言をするか、かかるものが組合役員にな

つてゐる場合どんな行動をとるか、或は又銀行と労働者間に紛争が生じたとき、彼等はどちら側となつて働くのか、或は働くだらうか、その答は明らかであらうと思ふ。

然るに課長や支店長を組合員とする銀行に於ては、何らかの拘束條件のない、我が國民は未だ民主主義をしっかりと身につけていないから、知らず知らずの内に地位とエラミがものを言つて、課長や支店長が役員或は委員の内の相當数を占めたり、或は大部分がそうであつたりする危険性がないと保證出来ない。これでは意識するとしなにかかわらず、組合は御用化するのではないかと思はざるを得ない。

だから私は課長や支店長の組合員になることに反対するのであり、役席者の組合幹部就任を反対するのである。

併し一方では組合幹部から役席者まで抜いてしまへば、組合幹部の政治力が薄弱になつて、經營者との交渉上極めて不安であり、不利であ



ると言うものもある。二の意見は一應尤もな心配であるが、政治力が多少薄弱になることと、御用組合化して組合の存在が骨抜きになる危険性と何れが組合員として重視すべきか、熟慮を要することと思ふ。しかし私は言ふ。政治力が多少低下しても組合の存在理由は厳存して居り組合は無にならないが、組合が御用化したら何が残るか。

或る銀行で曾て、役員者、主として課長と支店長から組合員の資格をとつたところ彼等は彼等だけの第二組合を作つたと言ふ話である。これは後日その無意味なのを覺つて合流解消したそうであるが、これ等何んの爲の組合か私には分らない。こんな勞組は百害あつて一利もないことは明らかで、恐らく誤解から生じた事件と思ふ。

私は常に役員者少く共課長と支店長は組合から排除すべきであると主張している。少くとも一步譲つて、組合員になることは許しても、

役員になることは絶対に排除すべきことを主張する。

要は、銀行の勞組は事業の性質と行員の性格から組合御用化の可能素因を極めて多く持つているから、勞組規約を作る場合その対策を十分講じて置くことが賢明であると思ふ。

勞組の御用化が法の精神を蹂躪し、國是たる經濟民主化を阻げることは言ふまでもないとして、如何に組合員の福利を妨害するか十分考へぬばならぬことであるが、尙一層重視しなければならぬことは、組合の強大なる力を社内紛争に利用される危険の極めて大なることである。これが爲に勞組が分裂するに至つては勞働者の不幸これに過ぎるものはなく、何んの爲の勞組か分なくなる。恐るべきは勞組の御用化である。

(本文はバンキング第四號(十月十日發行)より轉載したもので當組合を批判しての文書でなく全國勞組を對照とされて書かれたものである轉載に對して氏の厚意に深く感謝する N生)

## 顧客と遊離した

### 廣告はありな得い

植川支店 吉田 懸 治

廣告はいふ迄もなく營利の手段であるから、その理想としては「最少の經費をもつて最大の効果を計る」といふ所謂經濟原則に則らねばならないが、此れは飽迄も理想でありあまりにも最少の經費にのみ氣をとられその効果に思を致さなければ又經濟原則に反するといはなければならぬ。特に近來一般大衆の教養は著しく廣告と藝術とを接近せしめたのみならず廣告戦たけなほの今日藝術の香りのない廣告がどうして對者の心を惹き付け得られよう。廣告といふものは常に時代と共に流轉し一時も静止してない。感覺の刺戟動的な表現、反復手段、時代に調和のニューモア等常に心理學を應用し藝術的にして科學的工夫をこらした廣告を要求してい

る。此處に廣告術として更に／＼に考をなければならぬ問題があるのではあるまいか。我々は常に廣告の必要にして重大な業績伸長の要素となつてゐる事實を認識すると共に、進んで研究しよりよき廣告作製の爲め努むべきであり一人として非常事者であつてはならない。ひるがえつて當所の廣告現狀を見るに於ける要求と一致したものを見ない。それに加えて支店に於ては廣告の本質を知つてゐるのかとうたがひたうい様なふしもある。たとえは同一ポスターを二年も三年もその儘貼つて置くとか、或いは同一ポスターを店内に二枚も三枚も並べて貼付して置くとか、或ひは店の壁一杯に少しの美的觀念も宣傳的觀念をも無視した様にベタ、タと貼付するとか、その効果を稀少ならしめてゐる。かくの如くにして何で廣告の効果を期待することが出來得よう。かえつて店そのものの顧客に對する誠意を疑はれざれば幸である。更に又先般作製された營業案内にしても五頁ものあの太き

8. さのものに七曜表を入れるでもなく時間表を入れるでもなくたくさん出来て来たが持歸る客は稀でよしんば持歸つても一度見れば塵箱に捨てられてしまふのかと思ふとはらくする。これ程無駄な廣告も少ないであらう。此の際顧客と遊離した廣告はあり得ないといふことを銘記していただけたら幸である。

### 勤勞意慾について

本 部 茶 暮 天

賃金闘争はインフレの亢進につれ月々増加の一途を辿り、この儘の状態が続くとき、企業としての銀行經理面の限度に一抹の不安を生じ、無制限にも等しく暴騰する待遇改善費に何等かの新しい打開策の必要を急務とする時や消極的ではあるが意外に等閑視されてゐる勤勞意慾の問題について考察を進めて見やうと思ふ。銀行の經營合理化に就てはいはゆる重役の高

等政策から、組合員の自主的な預金増強運動等の積極案と、諸経費の支出節約、待遇改善等の消極案など問題は種々あるが本稿の目的外につき省略して、さて現在の埼玉銀行の人員費を見るに支出の六十五%に達し、そのうち時間外手当が百貳拾萬圓(十月分)の巨費に及んでゐる。これは何を意味し、何を物語るものであらうかこの人員費の研究改善、換言すると二千三百名各自組合員の勤勞意慾の昂揚によつて相當額の経費節減が可能となるのである。今更昂揚などの文字は戦時中の專制的な言葉と聞えるが、事實は然らず近代労働者の自覺に於ての昂揚なのである。この面に就ては、戦後銀行員の素質低下は當行のみとは言へない。各地銀行の機關誌々上にも覗ひ知れる事であり、道徳思想の忘却、即ち權利のみ主張し、義務を怠るの思想は時代の然らしめた所爲とは言へ、労働力を麻痺させ、その質を低下させてゆく傾向にある様である。この思想頹廢の悪風を速に改善せねば將

來吾々の身にその災禍は振りかぶさつてくるのである何故ならば現在の賃金制度は餘りに生活補給金にかたより過ぎてゐるが爲、賃金の本質たる労働の價値、即ち能率による評價を輕視してゐるので、能力ある優秀者の犠牲によつて、怠惰な行員の待遇を擁護してゐる結果は、賃金の本質に背き、悪平等となりて能力ある行員の不満は労働意慾の減退を招來する懼れを生じてゐるのである。

従つて新しい賃金體系、ことに電産式賃金の構成以來官廳諸會社の大勢は暫時能率給に、殆んど例外なしに進みつつあり、この際非能率行員の行くべき道は自ら明らかとなるであらう。

さて然らば能率は如何にして最高度の發揮が可能であるかが問題となるのである。

銀行員の労働價値は生産工場の如く一時間の労働によつて何箇の製品が生産されたかと言ふやうに一見誰にでも計算し得るものとは違ひ能率の測定にはやや技術を要するものであるから

ここで能率の分析についてある雑誌の例を借りて見やう。

「物を製造するには「材料」を「その製造が出来る性能をもつ機械」にかけて「運轉」をすることであり、能率と云ふ品物を製造するには「學識經驗」といふ材料によつて「勤勞行爲」といふ運轉をする即ち能率は「學識經驗」と「素質」と「勤勞行爲」と云ふ三つの要素より成り立つてゐる」と。

然しこの三要素の相剩關係の中で最も重要な役割りは勤勞行爲である。如何に經驗があり先天的な素質が有つても、仕事の上に効果的に活用せしめやうとする勤勞意慾の裏付けが無かつたら、生産は成り立たない。

例へば受付の應待に例を取つてみると、横柄でどんな態度のものか、心からの親切のものか前者は時間的にのみ見た場合の能率は勝るといへるが、後者は銀行の將來に及ぼす利益に於て遙に勝つてゐると言へる。

であるから能率は一定の方式のみでは決定されないし、元價計算にも正確な數字は簡單には計上出来ない。

労働基準法第三十二條には休憩時間を除き一日につき八時間、一週間について四十八時間を超えて労働させてはならない、と規定してあるがこの一日八時間といふ労働時間は労働力（精神肉體共）を對象として決定されたものと想像する。この時間内である限り労働源の枯渇は考へられない。換言すればその時間内の労働では重労働でない限りフルに運轉してもそれ程甚しい疲労や故障は生じないと言へるであらう。ことに銀行事務に於て如何に繁忙な仕事でも如何に頭腦をしばつても、疲労困憊翌朝は起きられないといふことは有り得ないと言へよう。併し乍ら吾々銀行には正味五時間の就業時間で、休憩時間を除いて二時間の餘裕があり、この三時間は事務終了後の整理時間に充分であると思ふといふ譯は、行員各自が眞の道德的な責任觀と

眞摯な自覺を以つて眞面目に日常の執務に精勵してゐたらこの整理時間ははるかに短縮出来る可能性があるからである。

僅か許りの仕事を後生大事に抱へたり、不急不要の書類を勿體らしく見せびらかせて勤務時間を餘のやうに伸ばし、上司の眼の色を覗つてゐる行員は何處の銀行にもあるらしい。ナンヨナル、シチーバンクの見學記によると事務終了後十分以内に退行せねばならぬ規定だとの事、勿論機械的設備も完備してゐて、傳票起票も元帳記入もすべてタイプ、計算も電氣計算器を使用してゐるが、日常就業時間内の事務室は緊張そのもので常に能率百パーセントに訓練され行員も元氣潑潑と立ち働いてゐるとの事である。それに比較するとき、日本の銀行事務制度の非能率さは、むしろ現實離れの狀態であるから先ずこれらは早急に改善すべきと思ふが、行員個々の心構へにも封建的思想が多分に残り、前記の上司の眼の色を見て執務するが如き非能率性

と非化學性とを一日も早く改善打破せねばならない。そして營業時間中にすべての仕事を合理的に處理して行くべき努力が必要ではないだらうか。かつて本部の某課長は執務上の心構へに就いて其の日の仕事は出勤前に計畫してかかれと業務通信に發表してゐるのは同感である。各種提出書類を期日間際に周章で作成して訂正數度の注意を受けるの愚さを繰り返へすやうな非能率なものや、家に居ては退屈だから日曜出勤して勤勉らしく振舞ふなどは、眞に勤勞意欲ある銀行員のやることではない。「時間に追ひかけられるより、時間を追ひかける」の心意氣を持つてすれば日常の事務は迅速に處理出來て、しかも餘裕を生じ將來起るべき仕事の準備さへも出來るのである。これにより健全なる執務能力の維持は繼續され、毎日の時間外勤務に疲労し、勞働力を磨滅してゐる現在の悪習慣から逃れて、翌日の事務能率は充分な休養によつて倍加され得るのである。然し時期によつて例へば

月末とか決算期は例外であるが、これは或る短期間に限られてゐる。或は自分の店舗はとても忙しくて事務終了後の整理が三十分や一時間では、と言ふかも知れない。然しそれは事務量に應じた増員をするか、もつと根本的には、優秀行員を配置して解決すべきである。要は果して營業店全員の眞實な勤勞意欲の有無によつて可能か不可能かに別れるのである。

この本質的な勤勞意欲を等閑にして、待遇改善のみを要求することは吾々の職場である、企業としての銀行經營の健全な發達を阻害し、待遇改善の源泉を己ずからの手で枯渇せしむる事に氣付くであらう。

かくして能率百パーセントの優良行員のみとなつた際には銀行の發展興隆はもとより、現在人員の三割と百二十萬圓の時間外手當の八割は節減可能となり、吾々全組合員の待遇改善が確立せられ、就業時間の短縮は體位向上に見るべき成果をもたらすと信ずるものである。

## 銀行調査職能の意義

……各々の現況と當行  
調査課の建設について……

調査課 黒 津 一 英

## 一、まへがき

古來その事業の如何を問はず、これをして誤りなかりしめ然も有終の美あらしめるために事業の對象に就て徹底的に知悉し、その過程に於ても常に關聯現象に深甚の注意を計らざるべからざることは常に言はれて來た處である。これは一國の對外的對内的政治活動についても各公共團體の事業についても更に亦營利會社についても言へようし、就中特に公共的色彩の多き銀行に就てはこのことは言へるであらう。即ち銀行は數萬、數十萬の顧客より多額の金錢を預り、これを業界に融資するため常にある程度の危険を負はざるを得ぬ。もとよりこのため

には、多年の經驗の中より生れた一定の比率に於て貸出を行ふのであるが、景氣變動の波は常に業界を洗ひ、今次大戰の如き重大なる事件を契機としてその波は或は高く或は低く、然も資本主義のもつ宿命よりしてかの昭和の初頭世界を震撼せしめた大恐慌も何時何時突發するとも限らぬ。更に複雑多岐を極める業界の中にも世界經濟の動向と國內的諸制約の下に榮枯盛衰は免れぬ。されば巨額の融資機關たる銀行に於てこの間の消息を把握するに、どれだけの用意ありや否やといふことは、當然銀行の業界の於ける信用並に地位を決定する。

事實後で詳説する如く、一流銀行は創業頭初よりこの調査事業を重視し、常にこれが整備を怠らざると共に該機關をして對外的には、歐米諸國の銀行會社に對し、對内的には諸官廳、日銀並に大口取引先に對して銀行權威の據り處たらしめて來た。これが直接の發表手段としては各種研究事業の刊行並に調査月報の定期的發刊

等が擧げられるが千代田、東京、三和、大和等の諸刊行物は今日その中の雄たるを失はぬ。

以上の意味からして、以下少しく調査職能の目的と各行調査活動の現況に觸れてみることにしよう。

## 二、調査職能の内容

調査の目的は簡單に云へば「銀行の立場より客觀的現象を分析し、この中より銀行經營の指針を抽出するにある。」の一言に盡きよう。これを更に具體的に云へば、

一、不斷に經濟金融理論及各種産業知識を深く研究すること。

二、常に生起しある社會經濟現象をあらゆる機會を把えて、理論との結び付に於て把握し、經濟界の新動向を正しく認識すること。

三、更にかかる基礎に立脚し、當行取引並びに將來取引を豫想される個別資本の經營動態を分析すること。

四、以上から得た資料を整理綜合し、當面の

政治經濟情勢の推移と主要業種部門の現況並びにその見透しを記述し、主腦部はもとより廣く支店網の末端に至るまで傳達すること。

五、(三)に於て分析した資料をカード別に整理し何時何時でも關係者の閱覽に供し得る如くすること。

等があげられよう。いま更にこの内容をはつきりさせるために銀行の主要分課組織との關聯の下に考察すれば次の如くである。

(一)外國 外國爲替が如何に銀行にとり有利であるかは、かの正金が僅少の預金を持つのみで巨額の利潤を收め得た事實を想起すれば足りよう、即ち爲替の操作は内國爲替に勿論云へようが、外國爲替に於て絶大なる威力を發揮する然りと雖も、これが圓滑なる操作を可能ならしめ、その危険を少からしめるためには、海外の政治經濟情勢の推移について、常に深甚の注意が拂はれなければならぬ。これ周到な用意と緻密な計畫の下に、卓越した調査機構が必要とさ



れる所以である。

(二)業務 いま最も重要視されてゐる預金増強の問題に關聯させて考察すれば、他行の預金獲得の用途を、宣傳を含めてあらゆる角度より検討し、常にこの上をゆく施策を押し進めることは焦眉の課題であり、これが直接の任に當たるのが調査部門である。

(三)經理 銀行經理の健全性を保持するためには、日々の動きに對し、常に經營學的見地から分析が行はねければならぬが、これは他行經理の現況と比較對照してはじめて意味をもつ調査の必要とされる所以である。

(四)審査 銀行の危険を直接に負ふものとして、亦銀行利潤を左右するものとして、審査の重要なことは、ここに更めて喋々するまでもないが、この審査が正確迅速に行はれるためには、主要取引先並びに將來取引を豫想される個別資本に對し、卓越した調査と不斷の資料の整備が是非共必要なことは言を俟たぬ。殊に今

日の如く經濟界が不安定状態にあり、その將來の見透しが極めて困難な時に於て然りであるがこれが直接の責任を負ふものは即ち調査部門である。

(五)證券 銀行に於て相當の社債、株式を保有する以上、市況の變動に對し明確な概念をもつと共に、各會社の實態についても常に慎重な考慮が拂はねければならぬ。而してこれが調査資料を提供するもの即ち調査部門である。

(六)資金 銀行の規模が大となればなる程、資金計畫の立案、運用操作の重要性は増大せざるを得ぬ。而してこの操作をして全からしめるためには、少く共日銀券の發行の状態、政府資金の散布状況及其の推移——現在その雄たるものは供米代金である——公團資金の動き、各種民間資金の分布状態が明確に把握されていなければならぬ。而してこれ等の實態を計數的にとらへ資料として提供し、資金操作をして誤りなからしめるもの即ち調査である。

(七)企畫 銀行經營全體を規制するものとして、企畫部門の存在はもつとも大いなる意味をもつ、而して國內經濟變動の方向を政治的、社會的動向並に海外政治經濟の歸趨と睨み合はし今後如何なる業種部門に融資の重點を置くべきか、地盤の擴張を如何なる地域に求むべきか、

將來銀行機構を時の政治經濟情勢に如何に適應せしむべきか、更に亦銀行經營の根本指針を如何に樹立すべきか等一連の課題の解決は即ち卓越せる調査機構の整備を以てはじめて可能である。

以上の外にも更に挙げられよう。然しながらこれのみにも調査が如何に多方面にわたるてぶのものであるか容易に推察し得よう。

### 三、他行の現況

しからば他行の現況は如何。順次のべれば大和銀行「調査部員二十名を越へ、藏書四萬冊を擁し、充實した内容と規模とを以て業界に臨んでおり」その毎月刊行される「經濟調査」、

毎週出される「東京週報」時に應じて發刊される諸勞作——例へばいま各界注視の的とされてゐるバンキングレポートの研究參考資料として譯出された最新版の「米國準備銀行制度の概要」の如きいまや業界賞讃の的とされている。

神戸銀行 毎旬刊行される「調査旬報」は行員教育用として絶大なる効果を收めてゐる。

千代田銀行 學界の雄たる三菱經濟研究所をもつだけに、その毎月刊行される調査月報は頁數も、三、四十頁に達し極めて優秀である。

蓋しこの種刊行物の白眉たるを失はぬであらう。

東京銀行 三萬冊に及ぶ内外圖書の集積は東銀のもつ最大の強みであり、殊に精選された外國文献は各行藏書中の正に偉觀とも云ふべくさればこそ、その外國爲替に關する透徹せる理論と該博な實踐的知識を含めた調査月報の内容が極めて卓越していることは蓋し不思議ではないであらう。

その外更に安田、第一、帝國、住友、東海、亦特殊銀行の歴史を背景とする興銀、勸銀等にも及ぶべきであるが、紙面の關係上割愛することとして、右に述べた諸行のほんのアウトラインを示すにとどめる。

#### 四、むすび

しからは當行は如何。もとより歴史古き他行に比すべくもないが、他日の大成を期して現在着々として整備中であることは事實である。現在はまだその一端を示すものとして、毎月刊行される調査月報、時に應じて發刊される調査速報があげられるとどまる。

これは要するに調査部門の意義は決して過少評價さるべきものではなくして、寧ろ當行の如くこれより更に雄飛せんとする銀行にあつては絶対に必要缺くべからざるものであり更に亦これが建設のためには、今後血のじむが如き努力と研鑽がなされねばならぬことを銘記せねばならぬ。

### 經營協議會制度の意義

本店 内山 進

經營は物的組織體であると共に人的組織體である。而し近代資本主義社會に於ける資本の蓄積及び其の結果に基く機械化の現象は、經營に於ける物的組織の優越性を動かさるものとしてきた。吾人はこれを株式會社の異常なる發達に見る事が出来る。ここでは労働は單なる一生産要素として賣買の對象物と見做され、機械に隸屬すべき補助手段にすぎない。近代産業に於ける大量、安價なる生産を目的とする經營者は、機械の採用と共に労働を種々なる手段によつて強化して行つたのである。労働時間の延長として、労働組織、監督の彈制による労働力の増強として、又償却率の切下げによる生産コストの低下の方法にまつて、とくに機械化のおくれた中小工業では、經營の合理化は専ら労働の面に

於て行はれた。かくして勞務者は生ける機械として其の人格を全く無視されてきたのである。彼等は自己の擔當する作業を通じて分業に参加するのみであり、其の作業が經營に如何なる意味を持つが、經營の實體はどうなつてゐるか等については全く無知であり、したがつて自己の作業には何等の新たな興味も創造も伴はない。勞務者の經營者に抱く不満不平はここに起るのである。

勞資の對立は歐米に於ては早くより問題化され、これが解決のため多くの努力が拂はれてきた。我國では敗戦後の今日になつて本格的に經營協議會制度なるものが検討され、勞務者の經營への参加が討論されるに至つたに過ぎない。

勞資協調の初歩的の姿は、工場委員會制度であり、第一次歐州大戰前までに歐米各國に存在してゐた。これは勞務者自らの組織によるものと、經營者側の發意によつて組織されたものがある。即ち (1) 社交委員會 (2) 厚生委員

會 (3) 工場委員會に分れ、前二者は經營をして勞務者の單なる作業場のみでなく、更に社會生活の中心たらしめ、勞務者の經營に對する忠誠の念を昂揚し、それによつて能率の増進を計らんとした。しかし吾人にとり最も重要なのは (3) の工場 (産業) 委員會制度である。

これは第一次大戰後ホイットレーの産業として、ドイツの經營協議會制度として發展した、兩組織とも従來經營者が獨裁的に行つてきた經營に、勞務者を参加せしめ、更に地域的にこの組織を擴大して全國的統一的な委員會組織たらしめ様としたのである。

ホイットレー主義は勞資協調を主とする産業團體説より生れたる自主的組織であり、社會政策的な面の職能として、賃金支拂條件、労働時間、厚生福利施設、雇傭條件、休日等について協議し、勞務者の人間たるの一面を全うせしむると共に、技術的には生産計畫に参加し、その改善、向上、能率の増進を行はんとするもので

ある。

次にドイツ經營協議會制度は其のホイットレ  
 ーの經營參加を更に一步擴大し經營に於ける經  
 濟、財務的な面の管理も行はんとするのである  
 例へば (1)貸借對照表に關する經營協議會の  
 參加 (2)當該企業の財務狀態其の他一般狀況  
 について説明を求める權 (3)經營協議會の監  
 査役會に對する參加等これである。かくして協  
 議會は經營の最高方針に參加しうるのみでなく  
 又事業の組織、其の運用に對する監査をも完全  
 に行ひうる道が拓けたのである。しかし事實問  
 題として勞務者の經驗と知識の欠乏のため又經  
 營者の種々なる政策によつて實權は依然として  
 傭主側に把握され充分なる効果を治められない  
 場合が多い。とは言へ勞務者が經營に對するか  
 かる參加權を要求して之を獲得したことは、そ  
 の勢力の伸張を勞資双方に亦認識せしめ、經營  
 者をして勞働を單なる一商品として物品視する  
 弊害を除去せしめ、經營の機械化の原理の中に

勞働の人格化の要素を加へ經營の民主化を促進  
 せしめた事は否定し得ないであらう。  
 最後に言ひたい事は、經營協議會制度は勞務  
 者の單なる一方的な權利主張の場ではない。權  
 利と共に自覺的な義務を伴つてこそ始めて意義  
 があるのである。今まで經營者によつて強制さ  
 れてゐたものを自主的に大局的な見地より行  
 ふにすぎない。かくしてこそ經營は有機體とし  
 ての美しさを發揮しうるのであらう。

### 生計の記録

本店營業部 佐波 一郎

#### 一 序

これはある家庭に於ける一ヶ月の生計の記録  
 である。題名の示す通り單なる記録であつて、  
 何等の結論をも導き出さうとするのではない。  
 唯現在のインフレが家計の上に如何に表れてゐ  
 るか、……それを經濟面から眺めて見ようとす

るのである。

更に進んでカロリー、栄養の面から検討し、  
 最低生活費までも算出するのでなければ本文は  
 何の價値もないものである。併し、今回は許さ  
 れた時間が餘りにも少く、以上の計畫は次期へ  
 護つて、單なる生計の實態の報告に止める。

#### 一 一 月間生活費

本文の資料にとつた家庭は、夫婦二人縣内の

某市に住む銀行員の家庭である。夫妻とも農村  
 方面に縁故はなく、その方からの食糧の援助は  
 期し難く、又、家庭菜園も全然ない。  
 従つて、配給以外には開買の外に主食類を入  
 手する手段は全くない。

さて、彼等の一ヶ月の支出の實相は次表の通り  
 である。此所にとつた期間は昭和二十三年九月  
 二十五日から十月十四日までの二十日間である

### 三 各支出項目の詳細

#### (1) 食費

1. 食	費	2,054.10
(1) 主	費	1,074.10
(2) (内)	配	980.00
(3) 副	調	960.00
(4) 嗜	費	344.40
	小計	690.00
	小計	6,092.60
2. 住居	光熱費	200.00
(1) 家	電	59.50
(2) 電	燈	220.00
(3) 熱	料	190.00
(4) 器	具	669.50
	小計	669.50
3. 被服	衛生費	605.00
(1) 衛	生	605.00
(2) 被	服	605.00
	小計	1,210.00
4. 文	化	50.00
(1) 新	聞	105.00
(2) ラ	ヂ	240.00
(3) 書	籍	395.00
	小計	395.00
5. 交	際	140.00
(1) 諸	費	200.00
(2) 其	他	340.00
	小計	340.00
6. 娯	樂	200.00
(1) 茶	菓	260.00
(2) 煙	草	66.96
(3) 酒	代	526.96
	小計	526.96
7. 其	他	500.00
	約	500.00
	總	7,789.96

(1) 先づ主養費の中配給されるものの金額内譯は次の通りである。  
 以上の數字に見る通り配給の主體は甘藷であつて、それも二割三割が腐つてゐて食べられない。その爲或程度の闇による補給が必要となる。闇買の内譯は次の通り

米	200.00
麥	134.80
粉	89.80
甘藷	109.55
計	54.00
計	1,074.10
東	2 120.00
西	2 400.00
米	2 460.00
計	980.00

これは彼等の収入に比較すれば多すぎるかも知れないが、生きる爲の必要でもないだらうか。

(1) 副食物

(4) 嗜好品

バター	300.00
紅茶	150.00
果實	100.00
計	140.00
計	690.00

へてゐるのである。

二 住居、光熱費

(1) (2) 家賃、電灯料は特記する事はない  
 (3) 燃料費

入浴料	110.00
石鹼 (浴用)	100.00
ク (洗濯用)	105.00
化粧品代	290.00
計	605.00

ガスもなく、又電熱器も使用出来ない此の家庭で、一東五十五圓のソダ薪四束は先づ普通の所であらう。  
 三 被服、衛生費  
 (1) 衛生費  
 浴用石鹼は月に一箇、洗濯

野菜類	150.00
肉類	210.00
魚類	400.00
其ノ他	200.00
計	960.00

内譯の中其の他とは納豆、海苔等である。  
 以上をカロリ、榮養素の上から考へて見る暇のないのは残念であるが、先ず充分とは云へないと思ふ。總額を日割にすると一日三十

二圓にしか當らない。若し一度一ケ十圓のコロッケを一つ半づつ食べてしまつたとすると、他の二回の食事は二圓で済ます事になつてしまふ。時にはスキ焼ぐらい食べたと思ふであらう。その爲には數日お新香で食べる日が續くことにもならう併し彼等は之の點を嗜好品に於て或程度解決してゐる。

(3) 調味料

配給になるもの二百五十圓四十錢其ノ外、ケチャップ、四十五圓。ソース、三十圓、酢、十五圓、以上問題はない。

(4) 嗜好品

以上の額は少し多く思へるかも知れないが、此所に副食費の少い理由がある。即ちバターと紅茶でパンを食べる事によつてお茶を節約し又、之に少量の果實を付けて、ピタミシ等の補給を考へてゐるのである。

四 文化費

(1) 新聞代は朝目一種。  
 (2) ラヂオ代は三ヶ月分であつて毎月のものではない。

(3) 書籍代

世界週報	75.00
リーダーズ	30.00
ダイジェスト	35.00
婦人畫報	35.00
文藝春秋	65.00
其ノ他	65.00
計	240.00
6, 3, 3, 制	100.00
消防へ	20.00
授護會	20.00
計	140.00



其の他とは季刊誌、パンフレットの類である。

五 交際費

(1) 諸寄附 月々一定しないがこれより少い事はない。

(2) 其の他

主人の勤め先以外のお附合であつて、近親の贈物等があれば此の二倍から三倍にはなるであらう。

六 娯樂費

(1) 親しい人々と話し合ひながら又休日には二人で食べたものである。

(2) 煙草代

配給煙草百十圓とハッピー五箇である來客用も含んでゐる。

(3) 配給されない月には支出されない。

七 其の他

これは雑多なものを含む。先ず家計簿に主人小遣として記載されるもの、此の内譯

は理髮代七十圓、煙草代、勤先での支出である。

此の期間には其の外別段の支出がない爲に推定約五百圓としたが事實はもつと多いと思ふ。又映畫演劇を見、時に銀座でお茶を飲んだとすれば此の支出は相當に大きくなるであらう。

事實、嘗て電蓄を修理したり、又小旅行を行つたりした月には參千圓以上になつたこともあつたのである。

四 結語

第二章の表にあらはれた各費目のパーセンテージは次の如くなる。

食費	五十三%	交際費	五%
住居、光熱費	九%	娯樂費	七%
被服、衛生費	十五%	其の他	六%
文化費	五%		

以上で見ると生計費の半分以上が食費であり又生きる爲にだけ必要な衣食住の費用は七十七

パーセントにもなる。これから見ると主人は只生きる爲にだけ働く事になり、僅か五パーセントの費用のみが彼等の文化向上の爲に使はれるに過ぎない。充分とは云へない食費のやりくりによつて榮養失調を免れたとしても、精神的な榮養失調のおそれが多分にある。心の糧は必ずしも金錢を要しないであらうが文化費はもう少し多くしたいと思ふ。

次に此の家計には豫備的な貯蓄がない、若し不幸に臨時的な出資があつた時には何れかの支出を削らねばならない。此の様に此の家計には幾多の無理がある。その原因は各支出項目への配分が必要の最底限度に於て爲されるのでなく収入の面から制的される所にある。必要だからこれだけ費ふのではなく、無いからこれだけしか費へないのである。

これまで述べた所には収入高は何程であるかは表れてゐない。併しこれはその金額を發表する事を許されてゐないから、此の資料としてと

つた期間には賞與があつた爲にやつと收支相償つた事を記すに止める。それならば通常の月にはその不足分を如何にしてゐるのであらうか、幸に彼等は相手とも両親が健在であつてその方面から援助が相當にあるのである。此の月間に於ても副食その他の形で與へられてゐるものが少くない。これらの物まで家計の中から購入するとしたならば、支出額はまだまだ増加するのである。この様な收支のアンバランスをどうするかと云う事は大きな關心事であり、それには社會的な問題もあらうし、家計の方法に對して種々の批判もあらう。だが批判は本文の目的ではない。單なる記録の發表に止めて終る。この記録の如き生計では生活と云へず、唯生存に過ぎない様にも思はれる。生活費と云はず生計の記録と稱する所以である。

\* \* \* \* \*



## 隨感

本店營業部 齋藤 益夫

吾々行員が日常業務に努力して居る現在、特に當行の諸々の企圖が非常に乏しい事に氣がつく、修養に研究に又スポーツに、全てが大銀行に比して遅れて居るのではなからうか。

今や當行は地方銀行の雄として躍進の途上にある時、之等諸施設を完備し、優秀なる人材を養成し、以て今後の發展に備ふべき必要を痛感するのである。最近スポーツに於ては、過日の野球大會の如く實に盛大なる行事が行はれ、全行員の融和親睦に其の責を充分果たしたと思はれるが、他の業務上の面に於ては、末だに過去の基盤と情性の上に立つて居り、特に個人の修養

研鑽に新しき企畫が試られないのは残念である。與へられたる日常業務を大過なく過すのみでは若き行員にとつて餘りにも滿されない感を懷く勿論個人の修養研鑽は個人の意欲によつて生ずるもので仕事に對する情熱と愛情とは、他を頼む迄もなしとは言ひながら、其の情熱と愛情に道標を設け指導を與へ、以て正しき方向に育成せしむる事こそ、將來への行員の質の向上に缺く可からざる要素である。

他銀行に於て新しき行員に、銀行員たるの性格と知識を認識せしめると同時に、各個人の専門的學術的才能を伸すが爲に、業務の合間合間に資料を與へ書籍を與へ、各個人の希望に基く研究をなさしめ研究の成果を發表せしめる機会もあると聞く、其の場合に於ける店長は、修養の師學術の師であると共に、又良き相談役であるとも聞く、當行に於ても、單に業務上の經驗豊富を以て任ずる許りでなく、理論的にも學術的にも、將來修養の面に於ても若き行員の指

導を任じ得る人々が、率先して行員の養成に努力を拂はれん事を若き行員は混望して居るのである。

圖書の設備も殆どなきに等しく、特に新しき現在の經濟界の把握に役立つ書籍、新しき理論に立脚せる銀行業務の研究書等、廣く行員に與へる設備機會は皆無に等しいのである、志を同じうする同好の士がゼミナールをなすも良く、經濟懇談會を定時に開き、互に現在の情勢の理解或は業務上の意見の交換による向上等に務むるも、決して無益な事ではない、外部の人々の講演を聞くのも良いが、當行内の、外部の事情大きな金融界經濟界の流れに日々接して居る重役の方達が、率先して親しく行員に知識を與へる事等も、望ましい事ではないであらうか、諸事多忙に追はれ、其の許されぬ方達も多いと思ふけれども、現に僅かの暇を割き、吾々に新しき知識を齎して下さる方のある事を思へば例へ回数が多くなるとも、又其れに出席する行

員が五人でも十人でも其の様な催しをする事は將來の行員の養成に益ある事を確信するのである、特に向上の意欲に燃える人々にとつて、大きな刺戟と力とを與へる事は論を俟たない。

或る程度、調査研究を目的とする業務上の實務と、理論の研究を爲さしめる餘裕を與へねば行員は目前の日常業務に汲々として、勉強どころか本一つ讀めぬ現狀に追ひ込まれるのである、假に個人として向上の意欲に燃えるとしても、其の方法と方向とを指導せねば効果ある結果は期待し得ぬも、又當人としても自己の行爲が正しきか否か、無駄なきか否かの疑義に陥り、自信が持てぬ結果から勢ひ消極的になつてしまふのである。

以上の事を最近當行が要望する預金吸收に於て見る時、各個人は預金の増加を熱望する餘り眼前の預金吸收自己の成績の向上に促はれ過る結果、大道を誤り當行の威信を傷つけるが如き事態を生ぜぬとも限らないのである、基礎づけ

られたる知識に立脚し、大局的に見た各人の責務を遂行するに足る人材を養成するには一朝一夕には不可能である。各個人の行動は個人の責任に於て意のままに行はしめ、而も大綱を誤らぬ限りの状態は、常行に眞の民主化即ち下意上達上意下達の完全なる一致を見た時に可能にして現在個人の意の儘の行動は放從から來る不祥事の元となる變なしとしないのである。現在行員の養成に意を注ぎ將來其の實を結ばしむる爲に其の努力を即日必要とする。現在の多くの行員は日常業務に追はれ、業務上の枠を通して社會の動きを見るが爲、變動する社會の正しき把握も、小さな窓よりする一面に接するのみにして兎もすれば經驗のみに頼る小人物的な机上業務に促はるる處が多分にある如く思はれる。常に經濟界の變動と密接に結びつく新しき感覺、刺戟、之に基いてなされる仕事への各人の不斷の努力、研究、熱情、を行員に特に若き行員に與へしむる様、諸設備の實施を切望するのである。

## 「そろばん」

本店營業部 島田 生

吾々は男女を問はず毎日ひとしく算盤を手にしてゐる。

算が合はなくて遅くなつても一算であつて喜ぶ時も、又事の大小を問はずやはり身近く吾々と共にしてゐる愛すべき無言の友である。算盤をしてゐることが即ち業務を豊かに處理する一つのくさびともなり愛着の念を深める所以であるとも思ひ周知の事柄とは思ひつその沿革の一帶を述たいと考へた次第である。

現在珠算と稱せられるものは古來和算と稱せられたものの一分科である。

而して「算法智惠寶」に「十露盤は三好筑前守の類族十河一存初めて作る」とあり「人倫訓蒙圖彙」には「十露盤は吉田七兵衛こしらゑしとかや」等とあるが之は虚説の様であつて勿論日本で發明したのではなく中國より傳來したも

のである。中國では何時頃發明したかといふ事は確たる文獻がなく。比較的優秀とされた幕府天文台の算家山路・澁川兩家の算書は明治元年軍艦開洋丸に搭載せられて北海に没し又内田五觀の藏書百卷は下總で灰燼に歸したので判明せず或は「數術記遺」に「珠算整帶四時一經三才」と書かれてあるので、漢時代であるとも稱せられ或は「算法統宗」に「宋人の珠戲語。已有算盤珠之說」則是法盛行於宋」と有るに依り宋時代とも稱せられ或は「算學啓蒙」に「九歸除歌」が載つて居るのにより元時代とも稱せられ或は「歷算全書」の「古算器故」に「明初に起る」と有るに依り明時代とも稱せられて居るが、現今一般には現在の様な構造の算盤は宋の末期より元期の頃行はれてゐたと稱せられ、又元の末期か明の初期より行はれてゐたものとも稱せられるが、後者の方が確實と思はれる。

我國に何時頃傳來したかといふ事に就ても確

たる事は云へないが凡そ今から五百年前頃に傳來したとみるものもあり、又「松屋筆記」には「元末に起り本朝に於ては寛永の未正保の頃等にや傳りけん」と述べて居るが之は新しくみすぎた様である。故に凡そ三百七、八十年前即ち元龜天正の頃、明の商人の手を経て最初は泉州堺港あたりへ其後は肥前の長崎あたりへ傳來したもので、我々の日常生活に應用される様になつたのは豊臣時代以後の事であると考へられる。

他國に於ては古來、ギリシヤ、ローマの所謂「ABACUS」ロシアの「ツオテイ」等と稱せられ、其他エヂプト、メキシコ等に我が算盤に酷似したものが數多く存在してゐたが現在は計算機に壓迫せられて顧みるものもない有様である。之に反して我國の算盤が益々隆昌の道を迎ふるは即ち日本の算盤が如何に計算に缺く可からざるものであつて且其の技術が優秀であるかといふ事を裏書してゐるものである(一九三六・七月私録より)

大體簡單に算盤の沿革を述べて來ましたが、吾々は科學の進歩と共に古きものは置き換られつつある現代文化のめまぐるしき過程に於て、尙愛用され座右の友とせられてゐる算盤に對し等しくその長い歴史と、獨特の良さに敬意を表したいとさへ思はれる。又吾々銀行員も何かしらそこに教へられる所が多い様に思ふ次第である

## 秋刀魚

村山支店 Y 生

天高く馬肥ゆる秋とやらは昔の夢——  
せめて夕飯の膳にシーズンの秋刀魚に私達腹の虫を慰めてくれるものとして……銀行がへりの黄昏のひととき近くの魚屋さんの店先へと足は向く。

群がるマグムの中から聲がする「アラ今年の秋刀魚は榮食失調かしらやせて仲々スマートだワ」の皮肉スタイルブツクのモデルならいざ知らず、秋深む海の幸サンマタイムの今がシュン

だとも云ふのに育ちのよくない細いのがつつましかに配給ルートを泳いでゐるのである。

三陸——銚子沖が本場も漁場は北くへと逆のほりして北海道邊からガタゴト揺られ送られて來ることは配給魚と名前の變つた魚屋の兄連も案外ご存知ないと云ふ……。

遠距離輸送の爲とは一應の理由でその内實はチヨッピリでも鹽を使へば百匁で五圓からハネ上る……の關係でミイラの鹽さんまがかくはお目通りと云ふ譯。

さすがに大衆魚なるかなでたとへ鮮度が落ちても正規配給のレンコダイなんかよりもはるかこれの希望配給の方が人氣があると云ふのだから面白い。

上物近海産の一鹽さんまは統制取締もなつて東京都からアウトカーブして近縣へと流れて行き今は「目黒のさんま」も變じたとか。

時代はうつる、されど秋刀魚に變りはあるまじ。

## 幸福について

飯能支店 岡 野 生

幸福について最近人々は漸くこの問題について關心を寄せ始めてゐる。三木清は彼の著「人生論ノート」の中で現代の人々が餘りに幸福の問題を度外視してゐると嘆いてゐるが戦後書店にちらほら見出される幸福論の著者は一般の關心がこの問題について沸き起つてきたことを物語るものではないだらうか。而してこの問題ほど又一般の人々が様々の論をなしてゐる問題もないであらう。しかも巷間に見られ又聞かれる幸福論がきはめて抽象的觀念的であつて幸福とは人がそれを感じない時こそ幸福なのであるといふ定説に終つてゐるのは餘りにも漠然とした現實から遊離した結論であることを嘆かざるを得ない。では幸福の具體的實踐の方法は果して如何なるものであらうか。その前に幸福とは如何なるものかについて少し考察してみよう。或

る人はいふ「あの人は金持で幸せだ」とこの人は單に物質的満足が幸福であると考へてゐる人であらう。又或る人はいふ「あの人は自分の好きな人と結婚出來て幸せである」とかかる人はその精神的方面しか考へてゐない人である。以上あげた例はそれらは勿論幸福の條件又はあり方の一つの型であるとはいへ、いずれも個々の小さな問題にすぎない。眞の幸福とはそんなところにあるのではない。ゲーテは「人格は地の子等の最高の幸福である」といふ。この言から推せば幸福即人格であり、それ故に彼自身に具はる彼の生命そのものであると考へられる併しこのことは餘りに抽象的すぎる。更に三木氏はいふ「幸福は表現的なものである、それは自ら外に表はれて他の人を幸福にするもの、それが眞の幸福である」と。

ここに至つて問題はやや具體性を帯びてくると共にそれは單なる個の幸福追求から飛躍して社會性をも帯びてくるのである。では他の人を



幸福にするものとは一體どんなことであらうか？ここに實踐の方法への思索が沸く。幸福の問題が物質的生活とそれに即して形成される人間關係に大きく依存してゐるとすれば、人間が生存してゆく爲に絶對必要な物質的生産そのものに即して成立してゐる人間と人間との基礎的關係、即ち生産關係の健全性なしにどうして眞の幸福が得られるであらうか。唯物論者の言を俟つ迄もなく幸福の心は物質的裏づけがあるところに始めて精神と物質との兩方面の統一による眞の幸福が見出されるのである。ただここに注意せねばならないのは、例へば甲なる人物が彼の物質的精神的満足を得た時ここに眞の幸福は生れるかといへば之は決して未だ眞の幸福に到達したとはいへない。何となればそれは社會性を欠いてゐるからである。前述した如く眞の幸福とは他の人をも幸福にするものでなければならぬ。もし甲なる人物の幸福がそのことによつて乙なる人物の不幸を招く場合を考へてみ

よ。

幸福は人格也とし又幸福は徳であるとしたならば甲の幸福はむしろ社會的に見て不幸である。さへいへばねばならなくなる。

では眞の幸福は如何にして求められるか？その實踐的方法は如何？

マルクスはいふ「哲學者は世界を解釋しただけだ、肝要な問題はそれを變革することにある。之を幸福の問題にいひ直してみれば次の如くであらう「今迄の幸福論者は幸福を解釋しただけだ。肝要な問題はそれを實踐するにある」と。

前述した生産關係の健全性は如何に求められるが、それは現在の搾取と利慾の關係を眞の社會的協力の生産關係に變革することにある。之の基礎的關係の變革なしに眞の人間の生活の樹立をして之に依存する心的生活の健全なる樹立がどうして求められようか。

かくて自由平等の社會、眞の人間の民主々義

社會の建設成つて始めて眞の幸福が見出されるものであることを確信する次第である。

### 悲境に泣く十錢札

秩父支店 豊田 生

日銀と云ふいかめしい洋館のドアを日本國の通貨と云ふ信念にもへつつインフレとか云ふ荒波の逆巻く世の中に人生修養に旅立つた私達でした。私達仲間が集まると富士山を三回も登つたり降りたりしても未だ地球を取巻くだけの同勢が有り乍ら世が世とは云ひ乍ら皆それらの悲しい運命に朝夕涙してゐます。

自分は今ある家のたんすの中に忘れられてゐる體です、弟の五錢もその通り配給のつり錢位にしか考へられず毎日をたんすの中でしつかりとだき合つてお互の不運をなぐさめ合つてゐます……。それにつけても何と世の中の人達は私達仲間を冷遇視して百圓札、拾圓札のみ喜ぶのでしよう……。此の間たんすにとち詰められ

る二、三日前の日曜、私の持主が寄居の親籍とやらへ食糧の買用しの時お供して見せられた、私達仲間の慘事なのです。

パーマに洋髪といふ現代色たつぷりな奥様が可愛い坊やの手を引いてすい／＼ホームに現れつと坊やのお顔の鼻たらしを見つけると物も云はず自分の仲間の十錢札を出し、ちよいとつまんで道端に捨てました……。亦或る紳士はパイプをつか／＼やつてゐたが何思ひけん、私の仲間を子燃にして、やに掃除……。あまりひどいので、お隣りのちり紙さんに聞いて見たら何んとちり紙さんの曰く「十錢なんて知りませんよ私一枚二十錢ですよ」……。その後幾日かして、たんすの中に放り込まれた仲間のくり言に「なんと／＼いくら考へても分らない自分の生れて来た使命がどこにあるのか？……」運命とは云ひながらこうした苦勞に毎日を成す事も無く暗い氣持で泣き明かしてゐますが、いつの日か我が物顔に尊大ぶる百圓札、十圓札より私達可弱

い拾銭札の喜ばれ尊ばれる時が来るのではないでしようか？……」皆様の厚き同情と冷靜な、御批判を御願ひして悲しい物語りを終ります。

## 秋窓偶感

川口支店 T、O 生

此の秋の夜長に窓邊の机によりかかつて、何とはなしに遠くで吠える犬の聲を聞き乍らぼんやりしてゐると、色々の考へが頭の中を往來する。どうせろくな頭でないのだから、考へもろくでもないことにきまつてゐる。實際考へて見ると、此の世の中は總てが偶然であり、偶然によつて支配されてゐる様な氣がしてならない。自分が現在こうして生活し、色々の友人關係を結んでゐるのも、又數ある職場の中の銀行と云ふ所で働いてゐるのも、更には私と云ふものが此の世の中に生れたのも偶然ではなからうか。この私が生るべくして生れ出でた等とは誰が斷言出来よう。思ふに人が生れるのは生れるの

ではなくして、生まれめられるのである。此の點英語はよく出来てゐる。ちやんと受身の形になつてゐるではないか。人生總て偶然であり唯人間はこの偶然によつて與へられたる基礎の上に於てのみ、その意思による行爲がなされるのである。此の興へられたる基礎或は機會と呼んの方がよいかも知れないが、それを充分把握認識して自己の基盤たらしめ、一階二階と建築して行くのが、即ち人生であらう。或る者は立派な建築を成就するであらうし、又途中にして崩壊し、新たなる基盤へと移動することを餘儀なくされ、一生偶然のまに／＼放浪する者もあるであらう。私も今やこの一つの基礎を與へられ漸く建築にとりかかつた所の存在であるが、果して鞏固たるものが出来上るか、又少しの風にも倒壊する様なものになつて了ふか、甚だ心もとなひのである。

思想の上に於てもこの偶然は支配するものであると思ふ。終戦後マルキシズムの思想が物凄

い勢で擡頭して來たことは今更云ふまでもないが、これとても思想言論の自由が棚ぼた式に與へられ、日本人が從來の國家主義的右翼思想に對する反動として、猫も杓子もマルクスの本でも讀まないと肩身が狭いと言はんばかりに喰いついて行つたのである。然し乍ら、偶然の刺激によつて與へられたる一つの思想に他を省りみづして熱中することは、どうかと思ふ。偶然一つの思想に對する關心を持ち得たことは甚だ幸であつて、此れをすら否定するものではないがその後には、それに對立する思想、廣くこれまでの世界の思想を検討し、よく前者と比較考究の上、それで始めて、その上に自己の生活を築いて行けば間違ひないと云ふ確信を得た時、その思想なり、考へ方なりは、眞にその人のものとなるのであつて、一つの思想のみを有難がつて、他を省りみようとしない、これが日本人の大きな欠點となつてゐるのではなからうか。私も未だ大學の豫科にゐた頃、ある友人より一冊

の本をすすめられ、それを讀む中に、すっかりその本に陶醉して終つた、然しそのみにて、その善悪は判断し得ない、その後餘り勉強もしない私が、色々の書物をあさる様になつた。そしてよく考へて見ると、やはり始めの本に盛られたる思想が最も立派なものであると云ふ確信を得たのであつた。その書物は河合教授の「トマスヒルグリーンの思想體系」と云ふ本であり今でも時々その頁をめくつてゐる。

總じて此の世の中に絶對的なものは何一つ存在しないと云つて過言ではあるまい。總ては相對的であり、偶然性を帯びてゐる。どんなに長いものでも絶對的に長いと云ふことは出來ない。必ずや、あるものに比較して長いのであり又短かいのである。マルクスがあの様な哲學を生み出したのも、彼の生存した社會が丁度あの様な資本主義の爛熟期に到達してゐたからであり、もしも彼が中世封建の末期に現はれたらならば、封建打倒の自由主義を唱へたであらう。總

べて主義なり、思想なりは推移する社會に應じて生れて來るものではなからうか。

人間は偶然を偶然として、肯定することを拒み、恰も自己が總てを成し得るかか如く妄信し勝ちであるが、人間の成し得る限界は知れてゐる。原子の破壊は出來てもまだ原子の創造は出來ないのである。素直に偶然性を認め、そこに自己の限界を見出して行くべきではなからうか。此れは一種の縮觀とも觀じ得るが、唯の締めとは區別されねばならない。

話は色々に飛躍するが、これも偶然であるから御諒承願ひたい。よく First impression と云ふことが言はれるが、これも偶然の價値を表はした言葉ではなからうか。これは大切なことで第一印象と言ふものは、心の中に仲々消え難いものである。それは意識して得られたものではなくして、對象より發散するすべてが、瞬間的に偶然心に寫し出された。その時の愛情であり長く人の心を支配する様になる。或る街角では

つたり出會つた若き男と女、そこにひらめく第一印象、偶然がもたらしたその出來事、あとは讀者の想像にお任せするが、然しそのみにては價値はなく、その後には於てそれを基礎として當事者の努力によつて完成されて行かねばならない。偶然の支配した出來事を、人間の意思と行爲によつて發展へと導いて行かねばならないのである。

人生は偶然の連続である。この偶然の考へより、私の神の概念が生れて來る。世に神は存在するとか、しないとか色々と論ぜられてゐるが、私に言はせれば、神が存在するとしなければ、生活の安定が得られないのである。私は思ふ、此の偶然を支配し司るのが神であると。それ故私の考へてゐる神は有難いものでも祈らねばならぬものでもない。人間には成し得る限界がある。その人間が成し得るところのものを成し得るものが神なのである。又そう考へなければ餘りも吾々の頭では解決つかないものが多い、

どうして、今日あんな所で、あんな人と會つたのだらうといくら考へても吾々の頭惱では解らない。その時神様がそうして呉れたのだと考へれば、それで解決がつく。この大宇宙が生成し

この様に運行してゐるのは何故か、究極は神の存在を肯定せねばならなくなる。私の思ふ神とはこの様なものである。人間では如何ともする能はざることを成し得るものが神であり、神の存在をここに認めることによつて安住の地を得るのである。それ故私達一個人が現在生存してゐることも、この神の思召しによるのである。ああ何と幸ひなるかな。

## 木犀の想ひ出

秩父支店

順 三

銀行の事務室に入ると木犀の香りが強く來た私は何處に木犀があるのかと思いつつ室内を眺めた。あつた、それはお客が毎日出入りする正面入口の所の台の上にあつた。多分お客が忘れ

て置いて行つたのである。私はこの木犀を取上げて、しみじみと香をあげた。

私は木犀については忘れ得ぬ想ひ出があるのである。

たしか、今から十五年位前の頃、いや七八年位前の頃かも知れぬ、私の近所にとても木犀を愛する、美子といふ私より二つ位年下の女の子が居た。その子はとても木犀を愛して、私に本を貸す時など良くしをりに入れてあつた。それから私は木犀を良く知る様になつたのである。

或る日曜日の事、美子が私に何處か今日一日遊に行きませんかと家へ來た事がある。私はすぐに美子と二人で、夕暮の一時を散歩した。夕日は早や別所の山に入らんとしてゐる、畑道を通つて行つた時、ふと美子は付すんで、「あら木犀が」と言ひ出した。なるほどにほいがしてゐる。二人はそのにほいを求めて歩き出した。あつた、それは少さいお宮があつて、その前に私の背より幾分高い位な木犀があつた。

私は一技折つて美子に手渡した。美子はうれしげに片手に持ちて「もうかへりませう」と私に言ったので、私はすぐにかへり道にと向つた。唯二人で夕暮に散歩するなんて何だか變な気がした。そして一週間位で美子の一家は、突然東京へ出て行つてしまつた。美子は東京へ行くので私と一諸に夕暮を散歩したのであつた。一年は過ぎた或る日、一通の手紙が届いた。私は封を切つた。「あつ」木犀の香がした。美子の便りであつた。一年を過ぎた時、未だに私を忘れて居ない。そして木犀を入れてくれた。それから便りは來ない、私は毎年木犀の盛りになると、今でもあの美しい優しい、美子の手が想い出される。今は何處で暮して居るのか、私にはわからぬけれど、私は拾ひ上げた木犀に言つた。

「美子よ、必ず再會はある。その時は立派な奥様になつて居る様に」  
私はしみじみとその木犀を眺めると、同時に

美子の幸福を祈つた。

### 圓滿な顔にならう

經理課 武田 與一

リーダース・ダイジェスト七月號に次のやうな話が載つてゐた。

「エイブラハム・リンカーンの顧問の一人が閣僚の一人としてある男を熱心に推薦した。リンカーンが、その意見に従はないので、理由をたずねると

「私はあの人の顔が気に入らない」

「顔つきはその人の責任ではありませんよ」

「四十才以上の男は、誰でも自分の顔には責任がある」とリンカーンは答えた」

この話位、私の最近の讀書中感銘を受けたものは少い。何故なら、私の日頃の考へ方に甚だ一致してゐるからである。私は常に人の顔つきは教育と修養によつて變はり得るものであると信念を持つてゐた。人々は顔は親譲りの先天的

なものである。これを後天的に變へ得ることは不可能だと嘗ふものが多いが、私はこれを修養によつて根本的に變へ得るとは思つてゐないが成る程度の變化は期待出来ると確信してゐる。特に顔全體の動きに就ては尙一層この期待を持つてゐる。

人が他人の顔から受ける感じには二つの要素がある。一つは顔の構造、即ち道具建から來る感じであり、一つは顔全體の動き方、表情からである。前者は先天的であるとして一般人は考へてゐるが、私は顔の造作の王座を占めてゐる鼻の形、目の動き方は修養によつて相當程度變へ得るものと思ふ。後者に至つては教育と修養によつて一〇〇%變はり得ると思ふ。このことは人生にとつて極めて重大なことである。

前記リンカーンの話はこの兩者の何れの面を重視したのか私には分らないが、恐らくその兩者を一括して觀察の内容にしたものと思ふ。然らば、良い精神とばどんなものか、私は精

神の働きには二つあると思ふ。一つは理智或は智能の働きであり、一つは情緒の働きである。この二つが完全に平衡して働くとき完全な精神活動が行はれるのであつて、これがよい精神であらう。この平衡が破れてゐるとき悲劇が発生すると私は思ふので、この平衡のとれてゐない精神の持主の顔は人に好感を與へない顔であり所謂顔つきか氣に入らないと言はれるのであらう。特に情緒の動きに欠陥があるときにこの感が深刻であらうと思ふ。

醫學者は智能は大脳により、情緒は小脳により支配されると言ふ。然して犯罪は小脳の生理的欠陥に基くものである。情緒が普通以上に發達してゐるものは、ヒステリカルな無責任な行動をし、又粗暴、奇矯な狂人的行爲をする或は奇人となる。併し發達してゐないものは一見甚だ靜かで犯罪を犯すまでは普通人と區別が付かないが、全犯罪者の一〇〇%までこの種の不具者であると言ふのである。



即ち犯罪者は智能の働きを情緒で統御出来ないことに原因して犯すと言ふことになるのであつて、このことは情緒の發達を計らない智能教育は世界の爲めに極めて有害であると言ふことを教へるのであり、この線を以て世上の事件を見るとき、我々は餘りに多くの思ひ當ることにぶつかるのである。

斯の如く犯罪は腦の發達如何にかかるとすれば、これが何等かの形で外部に出る筈はない。これが顔に出てゐるかどうか、數萬人の犯罪者によつて統計を作つた米國の學者があるこれを十六に分類した標準型の顔と言ふものは一つとして好感の持てる顔のないことを私はその寫眞を見て肯定した。

併し、これはその構造だけで表情は含まれてゐないことに注意して頂きたい。つまり、顔の型だけで既に精神欠陥者は摘出出来るのである。これに現在の心の動きが加はつた場合、顔が氣に喰はないからと排除したリンカーンのやり方に

私は正しいものと思ふ。しかも、四十才を越へてとつけ加へたところに一層考へねばならぬものがある。

前にも述べたやうに人の顔形は教育と修養によつて變へられるものである。親から貰つたものだから仕方がないとあきらめるには早過ぎる。我々は益々圓滿な顔になる爲に修養しなければならぬのである。

尙最後につけ加へて置くが、感じの良い顔と言ふことは美男子、美人と言ふことと同意義ではないと言ふことだ。美人は必ず常に他人に好感を與へると思つてはならぬ。美人に白痴美と言ふのもある。アメノウズメのミコトを現したと言ふ、オカメの面はその造作のどれ一つとして優秀なものはないにもかかわらず、如何に福徳圓滿な顔をしてゐるか、只單にユーモアな顔だと言ひ捨に出来ないと思ふ。(二三・七・四)

## 坂田三吉とハツタリ

大宮支店 劬 兒

映畫「王將」の中頃で坂田三吉が、關根八段との第一回戦で打つた、奇想天外とも云ふべき二五銀の極め手は、ハツタリに過ぎないぢやないかと、娘の玉枝からズバリと指摘される所がある。坂田はそれを聞いて妻の制止も聞かず、娘を毆打しようとするか、鏡に映る逆上した自分の顔を見て今の今迄優者として、快感にひたつてゐた自分が、急にたまたまなり物干台に登つて法華三昧に入る。

39  
このシーンは、この映畫の一つのクライマックスを形成してゐるが、然し果してあの極め手は、玉枝の云ふ如く單なるハツタリに過ぎないのであらうか、單に勝敗の爲に指す將棋は、將棋の道からはずれてゐることは、論をまたない所であるが、神ならぬ人間の指す將棋が、一世一代の將棋であるならば、ハツタリ的な指し方

も出てくるのではなからうか、あの場合思ひきつた奇妙な指し手の爲に勝つたからこそ、ハツタリだと云へるのであつて、あの指し手の爲に坂田が、大事な將棋に敗けたならば、坂田は人からあんな馬鹿な手を指す奴があるかと、嘲笑されたであらう、たしかに映畫の説明する如く坂田は押され氣味であつた。だからそれだけに無學文盲師匠もなく我流をのみ出した天衣無縫の坂田の個性が、關根を壓倒したと云へるのではあるまいか。

だから本來の將棋通から云へば、坂田の爲には、あの將棋は、敗けた方がよかつたのかも知れない、然し師匠もなく棋譜も讀めない坂田には、將棋の定石と云ふ事は、眼中になかつたと云へる。私は、坂田の二五銀がハツタリではないと斷定する程將棋通ではない、だからと云つて横紙破りの坂田の將棋の中に、坂田の青春を見出したと云ふ、織田作之助の可能性をあの映畫に適用しようとは思はない、何故なら演出者

伊藤大輔が、果して可能性の将棋を信じてゐるかどうかわからないからである。ただ不満なのはハツタリだと指摘しておきながら、それ以上坂田の将棋にダスを入れてない事である。あの映畫の前半の持ち味を後半に及んで影をうすくし、ラストをドラマチックな落ちとしてゐる事なのである。

私は、それが云ひたいばかりに、こんな文章を書いてみた。(一九四八・一一・廿八)



### 初秋の乗鞍岳紀行

川口支店 關根 正義

信濃と飛騨の兩國に跨がる、天馬空を行くが如き山容を持つ乗鞍岳の山麓に、日本一の標高を持つ温泉として湯川の静かな溪間に抱かれてゐる白骨温泉！此の温泉への遙かなる誘ひが乗鞍岳への山行計畫となつて氣易い友人と私は久し振りに降つた雨の夜の東京を後にした。島々から上高地行のトラックも半月前の穂高生活の歸途の様な賑ひも無く季節外れのせいも只二三人の客私達は澤渡行十時のバスで白骨行の温泉客と一諸に梓川を揺られ、前川渡下車初秋とは云へ照りつける陽の光を浴びつつ大野川に向ふ。

乗鞍行の前夜岳人クラブの寒竹氏に聞いた。山宿福島屋に立寄り鈴蘭小屋への便りを托されて再び強い午後の陽ざかりを番所の部落へさしかかると、白く波打つそばの花を前景に残雪光る乗鞍岳の山容が雄大に見え始め平和な美しい山麓風景が展開する。

秋草咲き亂れる番所ヶ原を横切り金小平の疎林の小徑を辿ると其の名も床しい鈴蘭咲く丘のなつかしい鈴蘭小屋に着く。

私達は此處で頂上小屋の様子を聞いて晝食後頂上へ登る計畫だったが其の前夜小屋の蜂蜜をなめに來た熊を今夜はどうしてもしとめねばと待機する爲に山を下つていた冷泉小屋の筒木叔父さんの都合で其の夜は仕方なく鈴蘭泊夜行で眠れぬ疲れをゆつくり休める爲には熊の出たことも私達には却つて幸であつたかも知れない。平家の縁續きとやらの山の人も思はれない品の有る親切な叔父さんに別れを告げて朝露の小徑を上原尾根に取付き常に左前方に目指す乗

鞍の山稜を眺め乍ら、木の根つこの多い登りを續ける針葉樹林帯に入つて電光型にジクザクと一汗かく登りも盡きる頃右手より白骨温泉口の溪が合して眼前に目指す冷泉小屋が現はれた。「おい、K君冷泉小屋に着いたぞ」と云ひ乍ら汗ばんだ額を一拭きして後を振り向くと重いリユツクの爲か幾分顔赤らめたKさんが小屋を見上げて嬉しそうな顔……

冷泉小屋の際には實に冷たい水が豊かに流れて全く小屋の名にふさわしい。

雨具だけでの軽いリユツクを背に頂上に向つた「何時もこんな軽い荷物たつたら楽ですね」とKさんの軽い足どりは昨夜の鈴蘭泊りがより効果的だつたらしく、はすんでゐる。

草いちごを摘んではその甘すつばい味を舌の上で溶かし乍ら、嗅まじりの樹林帯の登行が續いて行くやがて灌木帯に入ると間もなく位ヶ原の北端雪溪の仰げる明るい斜面のお花畑に出る規模の小さな雪溪の小流れに沿つてからマツ

サウ、ウサギク、アキノキリンソウ等咲く徑を  
劍ヶ峰と富士見岳の鞍部目指して岩傳いに登り  
切ると今は締切つた儘荒れてゐる肩の小屋に達  
した。

霧の間から眞青な湖の様な青空「うあー素的  
だぞ」と頂上の絶嶺劍ヶ峰に駆け登る。

なんと勿體ない三〇二六米の山頂に只私達二  
人シーズン後れの山はこんなにも静かなのかし  
ら……私達だけの山上の幸を喜び合ひ、乗鞍神  
社に拜し強風の爲直ぐ測候所のある阿彌陀まで  
駆け降りた原は今を盛りとトウヤクリンドウの  
白い花の群落、採取禁止令で今尙保存されてゐ  
るらしい。

選松帯から小流れに沿う徑で雷鳥の姿を見付  
けて「あれ雷鳥が居るぞ」とそつとささやくと  
人の居るのも知らぬ様に夕暮のそぞろ歩きであ  
る。夕なずむ淺間美ヶ原の山稜の美しさに見と  
れて冷泉で叔父さんの待つてゐるのも忘れての  
んびりして下ふ。

其の夜は冷泉のお風呂に温まつて叔父さん  
のお得意の山小屋料理に舌鼓を打ちスキー物語り  
に夜は更けて、たてしな山の肩から出た月がす  
っかり乗鞍の眞上に昇つた頃盡きぬ話を打切つ  
て眠りにつく。

冷泉小屋の夜明ばら色の朝が訪れた。

透きとほる様な秋の冷気が心臓の奥底に迄し  
み込んで来る。

山を降るのか惜しい様な青空其の上叔父さん  
の素朴な心からのもてなしと山の話は何時迄居  
ても盡きない。冷泉沸く小屋の黒光りした土間  
の感觸、白樺を焚く圍炉裏邊の寒圍氣、此の印  
象深い小屋とも、數分間でどうしても別れて行  
く氣にはなれなかつた。

### 三峯神社まで

飯能支店 山崎 節 夫

「三峯山！ 三峯山！ 三峯山！」寝ても覺

めても心から離れない。出發の日の何と待ち遠  
しき事よ。

「〇月〇日」待望の朝は来た。眠つては覺め、  
覺めては眠り、どちらが長かつたか自分でもわ  
からない。多分起きて時計を眺めた時間の方が  
多かつたらう。我儘な話だがちつとも眠くな  
い。昨夜「キツチリ」詰め込んだリネックが今  
にもパンクしさうに玄關で待ち呆けてゐる。父  
母が側から「忘れ物はないかい、あれは持つた  
かい、これはどうしたい」と心付けて下さるの  
も僕にはもう上の空でただ「うん／＼」と言ふ  
ばかり、もう忘れ物をしやうがどうしやうが早  
く時間が来て家を出掛け度くてたまらないのだ  
幸にも夜來の雨は名残なく晴れ天気晴朗、日  
本晴れだ。僕は飯能驛發午前六時半の吾野線に  
乗つた。それは遂に嬉しい喜びを乗せて走つて  
行く、然し兩三日悪降りをした雨脚は大分道路  
や鐵路を破損してコースは豫定とは大分變更し  
てしまつた。

僕等B班一行は、K教官を中心に元氣満ち溢  
れて車内は又なく楽しい。車窓に送り迎へる風  
物も何年振りに眺める事だらうか。思へば去年  
の今頃は身も心も疲れ果てて空襲に追はれてゐ  
たが、今年の今日は身仕度かひ／＼しく開放さ  
れた樂天下に若い一行が小鳥の様に胸ふくらま  
せて見る物きく物皆愉快でたまらない。

木曾の寢覺の床を思はせるといふ寄居長瀬附  
近の風物は何時見ても飽かぬ眺めである。午前  
九時五十分秩父線に乗り換へ一路三峯へと向つ  
た。ごう／＼岩に鳴る水音がするかと思へば蒼  
々とした清澄な静かな流れ荒川の流上流なのだ。  
電車は刻、一刻山氣を吸つてあたりは重なり合  
つた緑の葉の層を通して色々物の物が僕等を招き  
寄せる。この暫くは塵の俗界を離れ總てを忘れ  
て山の子に成りすましてしまつた。

目を奪う大きな岩、物凄い杉の立木、檜、楓  
栗、ぶな等の大木數千年を數へる様な巨木見上  
げれば梢は雲の中に有りそうである。枝は枝を

交へて頭の上に茂り合ひ自然の天蓋で飾つてくれる。ふさ／＼と枝の冠を頂いて立つのは槍でもあらうか。三峯驛で下車した二行は大輪まで貨物自動車で行く。道迫ると思へば開ける山間の面白さ。道の左右名も知れぬ小草丈なす雑草遠く近くに聳へ立つ大小無数の山々。目がくる／＼舞ひをする展望である。

大輪で下車した一行は橋の袂の店で晝食を攝る。出發だ。

道は一丁目から始まつて五十二丁目で終る。六丁目附近からあたりは晝尙暗い山林だ、その中をあれよこれよと植物採集をする。K教官殿の懇切なあれは何、これは何と教へて下さるのも不斷の教室とは又違つた味はひが有る。二十七丁目、瀧壺目がけて落下する瀑布の素晴らしさあたりはしぶきに濡れて冷え／＼と風は頬を掠めて去る。——小休止——さあこれからが難關らしい。

傾斜角四十二三度から五度位リュックサック

はしきりに背中で邪魔をする。瓜先き上りの道は吐く息が苦しい程はずむ。又も小休止。ここまで二時間を費してゐる。帽子の下から湧き出る汗、誰も汗の中から顔を出して目も鼻も汗と一諸に流れ落ちる様だ。誰かが思はず「ああ」と溜め息をつけば「もう少しだ。頑張れや。」とまぜ返す。一行は賑ひつつも疲れは加速度に加はる。間もなくそびえ立つ崖の上に立つた。下を見れば思はず心膽を寒々と冷やす、落ちたら完全におさらばであらう。

ふと異口同音「や下の方に雲が見える」とぞわめき立てる。始めの元氣を消し飛ばしてハア／＼と吐息する僕等を教官殿は笑ひながら「もう少しで頂上だよ。」と話しを入れて下さる。水筒の水をコクリと飲んだら喉がゴクリと鳴つた。口もききたくない。傍らに居られたK教官殿が「何だい山崎もう少しだぞ！」と力付けて下さつた。目先きがボヤ／＼して朦朧に見える。下ろした腰は上がりそうにもない。友達が

手頃の樹の枝を手折つて杖にしてくれたが背中

のリュックがどうにもならない。先輩のT兄が側へ来ていきなりリュックを取りはずして持つて下さつた。有難かつた。さまなかつた。身輕になつて段々元氣を恢復した、山に酔つたのだらうか、四十四丁目に辿りつく。目の前にボツンと立派な家が一軒建つてゐたのはこんな所にとびつくりした。あと八丁で頂上だ。五十丁目附近からしきりに雲が湧き出ではあたり一面取り圍んで何が何だか判らなくする。高山の感を深くした。やつと三峯神社第一の鳥居に着く。山の神秘か、神々しさか何とも云へぬ靈氣が迫る。九十九折りの曲りくねつた路を膝頭をグン／＼云はせてやつと第二の鳥居をすぎ絶頂に來た。

社前に謹んで參拜、恰も午後四時、何とも言へぬ喜びと希望が湧き立つ、苦しさは喘ぎつつやつと目的地に達したのだ。征服したのだ。男子の喜びここに有りである。



近くの植物園を見學する。午後六時頃再びサアと雲が出て沛然とした降雨になつた。

雄々しい雨哉、雨は山の靈氣を溶かしてひし／＼と胸に逼るものが有つた。



巢箱

川口支店 しのお草

白樺の林の中の小鳥の巢  
巢箱は丸い口を開き  
書簡小とりは留守だった  
まどろんだ耳に小とりの  
たのしいささやきが聞えて来た

「愛してゐます」  
たつた一言書いて、私は巢箱に投げ込んだ  
小とりのたのしいさへつりに  
うつとりと夢にひたりながら  
もう一度あの林の道をおるきたい  
受取り人の無いあの手紙の返信が……  
そして私の青春の返信が……  
ひらくと頭の上に舞ひもどつて来るかも知  
れない。

銀行娘

川口支店 のさきとしを

あの娘可愛いや銀行娘  
なにを思ふか人戀しげに  
もたれるカウンタ―に  
ほほ杖ついて

あの娘可愛いや銀行娘  
花の様に開いた札に  
イキなあの娘が  
イキなあの娘が氣にかかる  
あの娘可愛いや銀行娘  
走るソロバンあの指先に  
何か知れない  
何か知れない夢を見る

時道

秩父支店 野 菊

青たたみでものべたやうに  
ないだ海のやうに山合ひの  
穂ばらんだ稲は小きさみにゆれてゐる  
初秋の太陽は斜の光をなげて  
峠へ急ぐ影々追ふ。  
人跡絶えしか細き道は  
草に覆はれ早くもこぼろぎ  
あぜにのがれる  
おそぎきの野ばら一つ、二つ  
咲きほころびて夏を送る。  
漸く登りつめた峠の上は  
廣々とした畝のあと  
去年の日に涼を追ふて、  
憩ひし林はしのびよる秋の  
みのりにかすかにほほえむやうに。

詩

川口支店 S . H

流れ星

無邊際の天空まで  
投影された  
あの不思議な圖法は  
ギリシヤの様に正しかつた  
がこの空間の規定を裏切つて  
妙なる金屬の一片が  
はじけとんだ。  
夜光時計  
星はもう星座を結ばなくなつた。  
飛び散つた光りの断片に  
新しい論理を授けるなんて  
愚かなことだ



それとも僕は彗星の魔術を  
期待してゐるのだらうか  
グラスの底に残つた赤い液体を  
あれに向つて投げつけた人もゐた  
人間最大の情熱は死であると言つた人もゐた  
夜光時計が一時を指してゐる  
この部屋にある明暗は  
僕なのだらうか、彼なのだらうか。

蛭の誕生

空間の向ふ側から夕暮れが急にせまらうとし  
て  
小川が助骨のやうな波を立て始めた時  
浮草の一片がちぎれて蛭となり  
眞暗らな水底へ消えて行つたことを……  
誰も知らない。

波の悲劇

夜光虫をちりばめた波が

一瞬間美しい壁を築き  
次の瞬間どろどろとすれて  
船の後へ行つてしまふ  
そんなことが何回でも  
飽かずに繰り返へされてゐた。

海 澤

川口支店 のさきとしを

——奥多摩にて——

ひともとの白き花咲ける  
海澤のみちは静かなりける  
流れゆく水面に見入る  
その額の髪は吹くともあらぬ  
風に吹かれぬ  
いとほしといだけの身には  
君が熱き血潮 吾が胸の中に  
おののきてあり



短 歌

生活のうた

村山支店 三 茶

定きれし家なきわれをめぐる母  
弟と共に生き行かんとす  
昇進や榮譽はすでに用なくて  
榮える預金われは努めり  
しあはせに至る過程の苦しみと  
強ひてなくさめ將來を待つ

ゆ く 秋

大宮北支店 紫 峯

ゆく秋に 枯林は遠く つづきたり  
ふと仰ぎみる 夕暮の空

わが肩に 銀杏音なく 散りかかる

鎌倉山の 夕ぐれの秋

やはらかに 秋の日ざしに 汐鳴りの

ひびききこゆる 海近き家

由比ヶ濱 夕かたまけて 汐風の

君が黒髪 ふきなびきつつ

いつしかに 秋深まれり ゆるわかす

さだめと思ひ すすすこの日を

ひととき

川口支店 神山 静子

一日の勤めを終へし安けさや

湯にひたりゐて思ふことなし

よみさしの徒然草を傍に

眼つむりて雨に聴き入る



俳句

秩父支店 森前 英雄

仔犬来て雪のトンネルくぐりけり  
雪の夜の電灯あはし母といて  
降る雪に寝む電灯消しにたち

羽村支店 横田 立花

燈親し古日記など出して見ぬ  
秋耕や出水引きたる河原畑  
紅葉濃し大曲して湖水見ゆ

豊岡南 立川 良雄

客絶へて静かな晝や冬椿  
寂しさよ時雨の中の遅れ菊  
病む床に一本の冬木目を去らず

川口支店 星野 紗一

手袋に海涯しなく冷えて行く

手袋にひらくアランの幸福論  
電光ニユースこぼれ手袋貧しきを  
手袋に風渦巻きて汽車通過  
ドアを押す手袋の手にワルツ湧く  
二日酔椿姫の手袋が落ちてゐる

本 部 星野 茅村

雪あした人形踊る部屋閉めし  
雪あした隣家はあらぬ方にあり  
窓一つ灯して雪に起き出でし  
洗面の水は醜し雪あした  
結婚の夜より雪の朝明り  
雪の扉を開けば聲の溢れ出ぬ  
深眠の夢に夜の雪壓しかかる  
赤き灯は日記燃ゆる雪の深雪  
山茶花の白は夜となる色もてり  
埋火やし紋明らかに夜の客  
くさめせし顔に木立の突とあり  
冬の野の鋭きものに牛の角  
鐵路真直に冬武藏野をつくりけり



川柳

川柳「芋の花會」句集

中島 晴々亭

ポケットに思ひ出せない剩錢があり  
日曜日ドテラのまんま飯を喰ひ  
急行車前の婆アの顔に倦き

小川 不句字

あつけない金行く未を考へる  
辨當の温味へ朝の靴を履き  
日曜の張板へ来る赤蜻蛉

(信越北陸の旅にて) 原田 壽南史

新潟の宿唄通り吹雪く音  
灰色の空灰色の日本海

親不知狂つて見せるやうな波

武田 魯牛

集團買出しに車内小さくある  
パンパンの無恥か度胸か赤い唇  
カイレンへ責任がない旅の宿

市川 幽舎

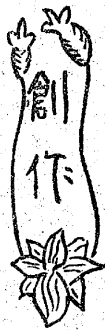
電熱器序にあたる今朝の霜  
水ッ鼻欠勤屈子に持たせ  
石鹼の見本いきなり嗅いで見る

川上 秋育子

昨日から食はない髪はチト目立ち  
ポーナスへ足らない妻の小算盤  
廣告を踏んで師走の人通り

熊本 茶暮天

インフレに洋服を喰ひ靴を喰ひ  
飾窓みんな買えない値が貼られ  
新婚を早く歸さぬポーナス日



## 雨

川口支店 星野 紗一

これは或る僕の友達から聞いた話である。しかも死んでしまった友達から聞いた話である。これから使ふ「僕」と言ふ言葉は、その友達のことである。

僕は何か非常に一生懸命で自轉車を走らせてゐた。片野さんの家へ近づくに従つて雨は益々強くなつて来た。母も「今日は天候豫報でも本ぶりになるらしいからよした方がいいですよ」と言つてくれたが、僕はさうしても行きなかつたのだ。今日行かなければ僕は何か大切なものを見失ひさうな氣がして、ゐたくまねなかつたのだ。それを母達が一家の食糧危機を救ふ殊勝

な行爲のやうに思つてゐるのがやたらにさびしかった。勿論僕だつて、家計の苦しさや、家の食糧問題について考へずにはゐられる譯のものでもない。そののみか、生きんが爲に費された努力といふものが、それ自身目的である美しい神聖な行爲であるといふこともよく知つてゐるつもりである。然し今度のことは、それだけが僕を動かした理由ではなかつた。何か知らぬが、もつと根本的に僕の魂をゆすつたものがあつたのである。僕は犠牲になることや、他人のためにかをすることが嫌ひである。若しどうしても犠牲にならなければならぬ様なことがあつたら、それが自分の爲にも必ず有意義なものに（たとえそれが觀念的でも）して見なければならぬ。戦前、戦中に於ける自己を守るためにのみ向けられた努力の結果として、何時の間にか身についてしまつた極端な個人主義的衣裳を容易にはぎきれない僕といふやつかい者が何うにもならないのであ

る。若し僕がもつと強い意志を持ち、自分の確信したことを必ず實行に移すやうな積極的な人間だつたら、今かうしてのべくと怠惰な生をひさぼつてはゐなかつたであらう。左にも右にも行き得なかつた僕である。たゞ一つ僕にとつて大切だつたものは主義でも主張でもない。この脈打つてゐる生命、現實に生きてゐる一個の魂であつた。正義とか善のために、時によつては、眞理や美のために己れを葬つてしまふ人々の行爲は確かに我々の眼を喜ばしめるものである。しかし、己れ以上に何があるのだ。己れが失くなつてしまつて、残つてゐるものは、己れに關係のない、石ころや枯木ばかりである。人々が犠牲者をほめたゝへるのには、決してその犠牲者の爲にはない。彼等は犠牲者によつて彼等が救はれ、幸福になつたことを祝福してゐるのである。その感激や涙も犠牲者のためには何の關係もないと言ふことを彼自身すら知らない。自分を祝福してゐることを犠牲者をほめた

ゝへてゐると思つてゐる。何といふ欺瞞だ、此の社會はそのやうな不幸を當然な正義のやうに行つてゐるのである。我々の周圍にゐる者達は彼等自身すらその本當の意味を知らない何げない言葉や態度で我々にそんなノンセンスな犠牲を強いてゐるのだ。

とうとう晶子との約束を破つてしまつた。晶子と逢はうか、それとも買出しに行くか、この岐れ道に立つて僕は相當苦しんだ。結局こうすることが常識的に考へれば誰れのためにも一番よい方法のやうに思はれるのだが、その結果として現はれる舞臺には、何か足らぬものがあるやうな氣がしてならない僕の複雑な色濃い將來の世界から突如大きな部分の場面が過去へ落ち込んでしまつたやうな物足りなさを感ずるのである。しかし僕は立派な音楽家の令夫人になつてゐる晶子に一體何を期待してゐるのだらうか、いやそれよりも、その晶子が、大きな青春の落丁を持つたこのかたわもの一介のサラリ

「マンに何を期待してゐるのだらうか。あの最初に晶子を知り始めた學生時代の僕に對する期待を、未だ彼女は持つてゐるのだらうか。僕が愛してゐるものも彼女が愛してゐるものも、今の晶子や僕ではなく、昔の彼女と僕だと言ふことを何かによつて證明出来るであらうか。あゝ若し本當にさうだとしたならば、本當にそれだけのものであつたならば、全く簡單である。僕は少女歌劇に對するやうな極く簡單な批評を與へるだけで充分なのである。僕は一度このことを小説に書かうと思つたことがある。そしてそのノートにこんなことを書いて見た。『僕が出征する直前に始められた彼女との交渉、その幾ヶ月かの輝かしき太陽と滴る緑の欣びをもう再び想はないことにしよう。もうこれからは、きつとあの頃のことを誰にも話しはしないし、文章にも書き度くない、そして、かうもりが飛ぶ日毎の夜のやうに、あの物語りがだん／＼すりきれて、失くなつてしまふことを望もう。たゞ忘

却することだけを望んでゐる僕を、諸君も又許してくれて、この物語りに關しては、何も質問を發しなすでくれることと思ふ』あゝ、しかし本當にそれだけが、僕の彼女に對する唯一の感情であり得るだらうか。僕は何のために、あの手べての音といふ音を殺してしまふ恐しい炸裂音の中に、或ひは空間を埋めつくす豪雨の中に疲れ果てた魚族のやうに呼吸しながら、何時終るともない悪魔の争闘の中に自己の生命を守る必要があつたのだらうか。色々な理由の中で僕に對して、大きな牽引力を持つてゐるものが、この物語りに關係したのかも知れない。いやもうかうなつたら、はつきり言つてしまつた方がさつぱりしていいだらう。戦争に對立して、僕が追求しようとしたもの、僕にとつて絶對的な目標になつたものを、はるかかの故國にゐる晶子に象徴させてゐたのであつた。即ち戦争や敵や死に對する僕の戦ひの激烈さは他を顧みる餘裕を與へず、僕が追求しようとしたものも幼稚

なものに具體化させるより他に方法がなかつたのである。晶子に對する愛情即、僕の眞理や藝術に對する意欲であつたのだ。たゞえそれが一個の偶像に近いものであつたにしろ、それ程僕を支配し、そして僕を敗北せしめなかつた以上、決して無力な移り易い夢ではなかつたはずである。しかもその晶子は、今僕の眼の前にゐるのだ。昔の物語りへ追ひやつてしまふには餘りに強く明らかな現實である。彼女が人妻であると言ふことさへ餘り大きな意味をなさないやうにさへ思へて来る。あゝ！僕の中に巢蝕つた得體の知れない一つの人格が飛んでもない事を計畫してゐるのであらうか。彼女の事を考へてゐると僕を包んでゐる空間の一かたまりが三次元外の空間にどん／＼落ち込んで行くやうな自分自身に對する恐怖に襲はれて來るのである。

歸還して數日後、晶子に出した長い手紙の返事は僕の宛てた所とは全く違つた住所から全然

豫期もせぬ「大木」と言ふ姓をつけて届けられた。その時も僕はすべてを知つた。手紙の中味を讀まなくとも部厚いペーパーに何が書かれてあるのかよく解る氣がした。おぼろげながらも感じてゐた一つの危懼が實に見事に實現したのである。遠い山の端にたゞよつてゐた時はむしろロマンチックなかすみが見事に増して夕闇となり、最初からの約束のやうに僕の手をどん／＼引つづつてどこかへ連れて行かうとするやうな何か恐しいものがあつた。しかし未だ僕は夢の様な淡い而もその時はそれが故に尊く見える何ものかをしつかりと抱いて見失ふまいとあせつた。それは丁度落ち行くものの恍惚感にも似てゐた。それから數日後約束通り何年ぶりかで彼女と再會したのである。彼女がその場所を靜かな公園でもなく、郊外の沼や森でもなくこんな入の出入のはげしいむしる大衆的な喫茶店を選んだ理由も解るやうな氣がした。彼女は意外な程冷靜だつた。そしてともすれば熱しが

ちな僕の表情がひげ目に感ぜられて、僕は思ったことを何も言ひ出せなくなつてしまつた。彼女は僕の全く知らなかつた彼女の長い記録を讀本でも讀むやうに次ぎ／＼にしゃべつた。僕がやつぱり何かを期待して彼女に逢ひに來たのであつた。感激的な場面が、僕の未來を最も好都合に解決してくれるやうなことを思つてゐたのかも知れない。しかしもう彼女の境遇がこうなつてしまつて、そんなことが、普通に許される譯もないし、やつぱり僕の期待は何の根據もない架空な夢であつた。何か目立つやうな色彩はすべて消してしまふやうなその場の雰圍氣は、僕のあらゆる意欲をみんな無氣力にしてしまふやうな魔力を持つてゐた。そして僕も彼女の語る至極當然と思へる論理を一つ／＼肯定する他なかつた。空になつたコーヒの器をちよつと傾けてもてあそびながら彼女は言つた。

「ねえ、何時かあなたと御一緒に『舞踏會の手帳』といふ映畫みたことがあつたわねえ、戀愛

なんて、やつぱり純粋なロマンチックなもの象徴だと思ふわ。もう私はあそこに出て來る人達の名前なんか皆忘れてしまつたけれどあの女主人公のやうな氣持、あの當時は、只夢のやうに美しいものだと思つてゐたけれど今はもう大人になつたやうな氣持で理解できさうなの」彼女はしばらく言葉を切つたが僕は何と言つてよいか解らずたゞ黙つてゐると、又彼女は續ける「今私があなたを愛すると言ふことは恐いことだね、あなただつて私にあまり關心をお持ちになるのはいけないことだと思ふの」

「そうかも知れないねえ」あゝ僕はこんな間がぬけた返事しか出來ないのだ。勿論夢はとても美しいものよ、けれど美しいものはやつぱり束の間の存在するが故に益々美しく、餘り永く大切に過ぎてゐるとつまらないものになつてしまふんぢやないかしら、昔のことを餘り重大に意味づけしないで、私達はもつと／＼現實をよく認識して本當に生きる道を築いて行かなければ

ならないのだと思ふわ。世の中つてなか／＼思ふやうに行かないものね。本當に複雑だわしかしその複雑さの裏には案外に簡單な道が私達に用意されてあるんぢやないかしら、それを早く發見するのが本當の幸福ぢやないかしら、戰爭で苦勞をなさつて來たあなたにそんな生意氣なことを言ふのは立場が逆になるかも知れないけど、あなたにもきつとそんな簡單な道があるはずよ。私はあなたが早くそんな幸福な道を發見するやうに、お祈りをする以外にもうあなたのお役に立つことが出來ない女になつてしまつたんだわ」僕はろくに返答もできず。たゞ煙草の煙を吐いてゐた。彼女の顔を横ぎつて流れるけむりは何の意味ももたらし得ず力なく消えて、薄暗い喫茶店の午後を創つてゐた。そして僕を釘づけにしてしまふやうな恐い力がこの床の底から湧いて來て僕を自由にしまひさうな氣がして、一瞬間背すぢに冷んやりとしたものが走るのを感じた。僕が何か反ばつて出來なかつ

た程彼女の話は當然であつた。昔の彼女との交渉を想ひ出のアルベムとして只ロマンチックなものとして未來に何も意味づけないやうにしよと言ふことは僕自身でも望んでゐたことであつた。しかし彼女の話は今僕と彼女とが向ひ合つて坐つてゐるこの最もいき／＼とした現實を生みはしなかつた。すべて今とは關係のないものばかりであつた。そしてその今といふ立場から、もう一度その話を思ひ返して見ると、一貫してゐると思つたその記録が忽ちばら／＼な一片／＼となつて、細かい紙切れのやうに散つてしまふやうに思へて來るのである。未だ戰爭の激しさからやつと解放されたばかりで病的なよろろふとした意識しか持ち合せてゐなかつた僕にはそれがおぼろげに感ぜられるだけで、それをあばくやうな鋭さはなかつた。どう／＼僕は自分の考へも彼女に傳へずその日は別れてしまつた。或ひは考へなどといふものがなかつたと言つた方が適當であらう。

それから後晶子からの手紙は續いて届いた僕といふものがそれ程重大な存在では失くなつた彼女が、主婦としての多忙な生活の中から、そんなに度々長い手紙を書いてよこすのが不思議であつた。そして手紙はだん／＼冷静さを失つて訴へるやうな調子になつて行つた。而も手紙と次の手紙の間には何も關係なく全く断片的で思想的に言つてもまるつきり逆なことを、平氣で書いてあつた。それは彼女が離れようと決心した僕を再び呼び返すやうな力になつた。そして手紙には一々辯解めいた返事を送り、その間にも彼女の誘ひにより、時には僕の方からの申出により幾回か逢ふことがあつた。その時も彼女の態度は手紙と同じ様に、次第に病的になつて行つた。そして彼女の息づかひを身近く感ずることは僕を益々彼女といふものに執着させる結果となつた。そんな氣持はあの過去のロマンチックな季節には決してなかつたものであつた。彼女も僕もその態度こそ違つたものであつ

たが、すつかり清算したと思つた過去が未だ整理しきれず、將來の世界に介入し始めてゐるのかも知れないと一應思つても見るのだが、決してさうばかりではなかつた。確かに今までになかつたあるものが、新しく創造されてゐるのである。あの夢みるやうな純潔な處女だつた昔の彼女は今の僕には、それ程魅力ある存在ではなくなつて來た。何とした事だらう。僕は人妻であり、僕の他にいや僕よりもつと或る一人の男を愛し而も、その男と最も身近に生活を營んでゐる一人の女性に新しい魅力を覺え始めたのだ。それよりも夫に内緒で、日比谷に日響の演奏を聞きに行かうだの、スバル座へ映畫を見に行かうだのと言つて、しきりに僕をひつぱり出す彼女の心境を、どう解釋したらよいのであらうか。この間も銀座で逢つた時晶子は「私はこの頃自分自身が何を考へてゐるんだか、何をしようとしてゐるんだかさつぱり解らなくなつてしまつたの」と僕をにらむやうな眼つきで言ふ

のだつた。あなたは一體私をどうしようとなさるつもりなのあなたに頼よつたつて、結局どうにもなりやしないんだわ、私の苦しみを益々深くするだけの能力しか持つてないあなたに。あゝしかしどうしてもあなたは私の運命を左右する鍵を持つてゐる。たゞ恐しい存在だわ」と言つて、おびえるやうな顔色で僕を見る彼女を、僕は今更のやうに美しいと思つた。一體アダムとイブの二人によつて生れた人間といふものは、その本質が矛盾なのではなからうか。意識することによつて、自然の法則を破つて生れ出たこの人間といふ異端者は永久に救はれざる罪を背負はされ、絶対に解決し得ないスフィンクスを解決しようと、已れ自身の矛盾に死ぬまで苦しむのではないだらうか。少くとも人間的な人間程、益々その意欲と苦惱の深刻さに見舞はれるのだと思ふ。もはや絶対に動物にもなり得ないし神にもなり得ない。ただ人間でありより人間であらうとする以外に方法のない人間、そ

れはギリシヤの昔から信じられ、肯定されてきた唯一の營みである。キルゴールによつて惱みサルトルによつて明るみに出されたこの矛盾としての實存の姿、その中に僕も浸つて行かうか。それにしても恐しきものは怠惰である。何をしようか解らぬ。しかし怠けてゐては駄目だといふだけは解るのである。

「そんな事を僕に聞いたつて無駄です。僕は只あなたから映畫を見にみかると誘はれると、どうしても行かざるを得ない。そしてあなたの傍にゐて、時々でよいからあなたと話をしてゐると、悲しみとも苦しみとも喜びともつかぬ得體の知れない感激が湧き起つて來る。それが僕のすべてですよ。それに僕はひきつけられるのですよ。どうしたらよいかと、どうなるか等と言ふことは僕には全く解らないのです」といから熱しきみに僕は言ひ終つて、何んとも言へない不快さを伴つた自分自身の體臭を感じた。そして何かあはて氣味にポケットから白いハン



カチーフを出して汗を拭き始めた。彼女はそんな僕の舉動を見るときもなしあがめながら言ひ始めた。

「私は夫を深く愛してゐます。しかし私と夫との間には何か知らぬ眞暗な溝があります。そしてその溝を早く失くさう埋めようと毎日思ひながら、あなたのお手紙をいたゞいたりすると、何かあなたとお話しし度くなり、夫に内緒であなたに逢ひに来てしまふのです。」と言つて僕の肩の邊りをしばらく見つめてゐたが、急に「あゝあなたは恐しい。本當に恐しい。その恐しさが磁石みたいに私を奪ひさうな気がする」と狂犬のやうに肩を振はせながらさう言ふと顔を両手でおさえてしまつた。僕の魂に如何なる悪魔が巢喰つたか。その時の彼女が何と美しく見えたことか、あの昔の舞臺にも彼女がこんな美しく見えたことは決してなかつた。完成された發見されるべく用意されてある自然の美しさではない。矛盾をはらんで今の瞬間創造された

美しさであつた。

その日の印象は自分の弱さを感じる程、強く刻みつけられて脳裏を離れなかつた。そのまゝで放つて置くことがそら恐しく、たえ難く感じながら怠惰な日を送つてゐると、十日ばかり経つて又彼女から誘ひの手紙が來た。さすがに彼女も深刻に考へてゐるらしく、不用意な感情を表はさずに、日曜日には是非お逢ひしたいと言ふ用件のみを書いてよこした。或ひはその時彼女が新しい問題を提出するのではないかといふやうな心配さえ感ぜられるやうな文面であつた。彼女の態度には非常な眞げんさが伺はれた。人間は多くの場合いゝかげんな情性のまゝな生活をして自分といふことを、その自分の周囲の中々眞げんに積極的な意欲を持つて考えないものである。眞げんな態度は結局さうせねばならぬことだが、それは何かそら恐しいものである。その時も僕は何か生命が脅かされる危険に似た壓迫感を直感して、やたらに晶子から遠ざかり

だかつた。決して行くんぢやないぞ、今度行つたらとんでもない事になるぞ」と僕をしんげんに警告するものがあつた。

土曜日の夜は何時になく珍らしい遅くまで起きてゐた。二、三日降りつゞいた雨も晴れて、白いシャツの肌ざわりが冷んやりする様な涼しい夜であつた。窓をいつぱい開け放して河上肇の「經濟學の大綱」を讀んでゐたが頭がどんどんさえて行くにもかゝはらずさつぱり頭に這入らなかつた。磨かれたつや／＼しい机と、うす青い電球を點けた灯を見つめてゐると、僕のつかんでゐた水銀のかたまりが、ガラス板の上にひとりで落ちて鋭く而も細かく散つてしまふやうな幻想を感じた。水銀のかたまりはどんどん落ちて行つた。そしてどん／＼散つてどこかの暗闇へ消えて行つた。後に置いてあるオルガンが突然ピアノに化けて、ショパンの不協和音でも奏き始めるやうな感じがする。何時ものやうに朔太郎の詩をひらいて見た。詩を一人で朗

讀するのは何時もの僕の日課である。此頃は大抵朔太郎のばかりである。今日は「青猫」にした。

二つ三つ讀んだが何時ものやうに感激しなかつた。僕の現實の方が勝つてゐるやうな氣さへする。しかし最後に「くづれる肉體」といふのにおつかつた時、何かはつとした。僕の中にもた何ものか、突然クローズアップされ、その詩にとびついて行つた。

#### くづれる肉體

蝙蝠のむらがつてゐる野原の中で、  
わたしはくづれてゆく肉體の柱をながめた。  
それは宵闇にさびしくふるへて、  
影にそよぐ死びと草のやうになまぐさく  
ぞろ／＼と蛆虫の這ふ腐肉のやうに醜くかつた。

あゝこの影を曳く景色の中で  
わたしの靈魂はむづがゆい恐怖をつかむ  
それは港からきた船のやうに遠く亡靈のゐる

島々を渡つてきた

それは風でもない、雨でもない、  
そのすべては愛欲のなみにまつはる暗い恐れ  
だ

さうして蛇つかひの吹く鈍い音色に

わたしのくづれゆく影がさびしく泣いた。

僕も泣きたかつた。誰も起きてゐないこの夜  
更に、思ひつきり大聲で泣きたかつた。限りな  
くさびしい限りなく醜い、そして限りなく眞實  
な世界が僕をとりまいてゐた。それは泥沼の中  
に足をとられて腰がぬけてしまふやうな苦痛と  
恍惚感を伴つたどうすることも出来ない世界で  
あつた。そこまで来たのは誰のためでもない。  
やつぱり僕の意欲のためであつた。その意欲は  
もう到達してしまつたのだ、いや僕を到達させ  
て、意欲は無責任に解散してしまつた。泣け泣  
けその時こそうんと泣くべきだ。涙が涸れて鏡  
の上に何かの結晶が出来るまで、さうして蛇つ  
かひの吹く鈍い音色にくづれ行く僕のさびしい

醜い影。さうだ泥沼の中でくづれてゆく肉體の  
柱に何かと起らなければならぬのだ。僕は絶  
えず脱皮するジイドのやうに簡単に自分と袂別  
できるとは思つてゐない。しかし若しかすると  
蝙蝠のむらがる野原で吹く蛇つかひの笛が、だ  
ん／＼遠くなつて、ロマンチックなものになつ  
てしまつた頃、僕は新しい意欲の次第に充滿し  
て行く青い肉體を感じる事が出来るかも知れ  
ない。

突然黄色つばい蛾が「ばたつ」と電燈にぶつ  
かつた。その音がどえらく大きい音に聞えた、  
そして何か夢から酔めた時のやうな或る種の不  
快さを伴つた目まひに襲はれ、濡れた砂のやう  
に少し冷やつとする疊にねそべつた。とに角  
明日は晶子に逢ひに行くのはよさう。晶子がい  
くら心配したとしても、電話をかけたなり、手紙  
など書いたりして自分を辯解するやうなことは  
し度くない。僕は始めて自由が得られるやうな  
氣がする。短い芝生の上をどこまでも轉がつて

行く圓い白いボールのやうな喜びを長い間忘れ  
てゐた。明日何をしようかと色々考へて見た。  
「買出し」さういふことばがふと思ひついた。  
何かとてもすばらしいことばやうに思はれる。  
確かに僕にとつては面白い問題になる。食糧の  
ことについては父や母に委せつきり、何も考  
へたことがなかつたが、今度は僕の責任に於て  
やつてみたい。思ひきつてやつて見たら、その  
向ふ側に案外今まで氣がつかなかつた世界が展  
開されるかも知れない。どんな風になるか知ら  
ない。解答なんて言ふものは幾つもあるもので  
ある。

習日は雨模様様の天氣だつた。しかし僕にとつ  
てはむしろその雨が面白かつた。きら／＼光る  
何か鋭いものがあるその雨がとても僕の魅力  
をそつた。きら／＼する自轉車の金屬をぬらし  
帽子の下の僕の肩をぬらし、雨外套や靴、ツポ  
ンをすべてのものをぬらす雨に、思ひつきり身  
體をさらけ出して、僕は疾走して行つた。突然

眼前に片野さんのあの薄暗い土間が浮んで來  
た。しきつてあるゐるりに赤い火が燃えてゐ  
る。片野さんは僕のレイシコートを乾かしてゐ  
る。その瞬間であつた。僕は突然何か非常に強  
い衝撃を受けた。すべてが暗くなつた。もう何  
もなくなつたのだ。僕と共にすべてが失はれて  
しまつた。それは全くまた／＼くまの出來事であ  
つた。

僕は死んでしまつた彼から、奇しくもこう言  
ふ告白を聞いた。僕だけしか知らない物語りで  
ある。(終り)





## 糧追ふ人々

大宮支店

美奈川倫之介

(前回迄のあらすじ)

ある山村民々々義の風は、この山合の邊境に迄吹き及んでいた。この山合の猫の額程の土地に散在する農家の中に大して大きくもない小作で暮して居る者治作親子があつた。子は兄妹二人建作と美代といつた。建作は中等教育も受け兵隊の経験もあり、村でも青年間はもとより村民の各方面で信頼されているリーダーであつた。美代も幼い時母をなくしてからは田島はもとより家事一切を切り廻し、その上女子青年の幹事を勤める等のしつかりもので、きりようも十人並以上であつた。處で治作には子にも云ひ得ぬ秘密があつたのである。それは建作が實の子ではなかつたのである。彼の妻が美代を産む前だつたが、彼の地主先であり、京でも名の知れた隣村の園田の奥さんの秘し子、つまり建作だつたのである。園田の主人がシベリヤへ出征中何處の誰ともわからぬ者と奥さんとの間に出来た子供で、正當の光りを

恐れて闇から闇にほうむられ去つた建作の生ひ立ちであつた。處が二年前頃から園田の主人は負傷の傷が根本的な原因となつて氣が狂つてしまひ、その間に出来た一人息子は一年前の夏谷川で遭難死してしまつた。そして初めて奥さんの頭によみがつたのは直接腹をいためた建作のことであつた。それからあの手この手と建作を引き戻さうとする奥さんの苦肉の策、それをついに今日治作と直呼びつけねばならぬ羽目に陥入つてしまつたのである。今日早めに田を上り建作は村大會へ出掛け後晩飯もそそくさと出ようとする治作に不審を抱いた美代は遂に彼の秘密を知つてしまふ、そして懸命に治作をとめるのであつた。治作も美代の建作に對する唯ならぬ情愛と夫婦にまでと念願する彼自身の夢を考へあはす時一端は思ひとどまるが、併し又一方地主對小作の間柄であつて見れば、當然先行きを考へる時治作の胸は千々に亂れ板ばさみに苦しむのであつた、が結構いふ事だけはとり止め、建作へは美代がちか話をするに決る。思ひあぐねた白髪まじりの頭を月光にさらした彼はぼつり／＼笑ひに話すのであつた。「いい星空だな……美代明日は新宅の下さ刈つてしまふべ」百姓のみに出来るあきらめ土に生きる根強さ美代のほほには銀の一本二本涙のかかるのが月の光にくつきりと浮いて見えるのであつた。

ギリシヤ神話に見られるプロメイトスは人も知る如く人間の世界に天上の火をもたらした人間文化の始祖であつた。彼はその罪によつて多くの苦難を嘗めねばならなかつた。進歩が苦難をよぶその事、あたら誰しも禁じえぬ人生の偶然的悲願ではあらう。

その頃建作は歸り道にあつた。連れは隣の太吉で二人とも先刻から黙りこくつたまま、行手にうつる巴れの影を眼で互に追つていた。建作は明日一番で東京へ行く事は既に前々から幹部の間では内定していたといつてもよかつた。識見からいつても學歴から見ても若い彼にはうつつつけの役であり、又敵の少い彼には村長も村民の大多數も彼を信頼して居たのである、それで今夜大會は彼の東京行き、の全國農民大會の代表として大多數で決定したのである。

勿論彼にも反對者はない譯ではなかつた。村境の花木の齋藤はその筆頭である、所謂小地主の一派等であつた。寧ろ彼の東京行きに荷せら

れた任務は彼等の爲でとてもいつてよかつた。道は折度縣道から折れて鑄守の森の裏手にかかつていた。今迄絶えず先行してゐた。二人の影がすつと森影にすい込まれた途端、黙々と連立つていた太吉は急に立止つてしまつた。ふと二三歩ゆきづれた建作は思ひあまつた様な太吉の面を月かげに振りかへつて聲をかけた。

「小父さん急にどうしたんだ。氣分さ悪くなつたのでねえだか、馬鹿に今夜は集りよかつたでな」太吉はほんの少し首をふつたきり、「建さー！太吉は年の若い建作をよく子供時分からこゝろ呼んでいた。建作も太吉は人の好い小父さんとして、何か父には云へぬ事も話してしまふ様な親しい相談相手とでもいへる間柄であつた。

「建さ、お前明日東京さ、何時の汽車でいくだ」  
「東京さ、うんおらあ一番でいこうと思つてるだ、成るべく都合さつきしでえ野良さいをがしい時だて早く歸らうと思つてな、まあ三・四日はかかるべと思ふだが、了はり次第歸つて皆さ

喜ばしてえと思つてな」  
 「さうか、そんちや閑なんかなかんべえな、無理な事だて」「小父さんなんか」

「うん、いや何んでもねえだ、うん唯一寸頼みてえ事があつただからよ、なあにそれよか、村の爲ちや昔の公用と同じだべ、おらあ事なんぞしてくんろたつて無理な事だし……それに村の者には悪い事だしな」

こういひつつも失望の面持が有り／＼と太吉のりんかくのあうい面に一瞬走るのを建作は見落さなかつた。

「小父さん、何んな話だかしんねえが、どうせちよく／＼行ける譯でもねえ東京さだし、一日三日ま無理さしたつて、どうつて事も云ふ様な村の者でもあんねえし。な小父さん一つ聞かして呉んねえだか、場合によつちや……」

一日二日手間どつたつて都合なうは、しさいはないだらう、事實その時建作は一瞬こう考へたが、併しこの事が實はこの先、建作の身に思は

ぬ障害となつた事は夢にも知らない事ではあつた。「うん、いや止すべ。何んぼ何んでもそんちや餘り虫のよすぎる話したて」「どうしてよ小父さん」

太吉は歩き始めていた、後から建作は重ねて「小父さん、な、話してくれ何んだかこみ入つた話の様だが、おらあも一度話しかけて見られりや、何んか變だでな。どうだへ、そりやおらあに出来る事なら何とか都合もつけんべえからよ、な、話しさ聞かしてくんねえだか」

「さうか、でも何だかおらあ話しさしくなつたで、つまんねえ事でお前に心配かけてはな」太吉にはふだんから、よく／＼思ひつめてでない人と人に物を云へない性分があつた。彼の妻も彼の所に來た當初は驚くよりも寧ろあきれ反つた程であつた。彼は見合した時から式が終る迄一言も妻に話しかけなかつた位で又話しかけの始めの彼の言葉が驚いたものであつた。

「お前はおらあとこなぞ來るんぢやねえだ」

と言つただけだと聞いている。とに角彼の妻は美しいとは云えぬが人眼には好かれる面立であつた。でも誰もがする夫婦生活一通りの事は何一つ故障な今迄通して來た彼ではあつた。無口は彼の性格殊に内氣がそらさせるのかも知れなかつたが、併し彼は學校の成績にあまり自信がもてなかつたと同時に又漸つと高等小學校を出ただけの彼は、彼自身已れの思索をまとめて人前に發表する様な事には、ろゆうちよと云はうか、何かこの年になつても自身が引け目に見えてならなかつたのである。

二人の歩みは何時とはなく又止つて居た、折度鎮手社の境内に道は入つていつて神樂殿と社庫のある中程の所であつた。すぐ二人の右手神樂殿よりには樹齡三百年以上と専ら取りきたされて居る杉の大本が封建の持味そのままに、繩にまかれて聳えるといふよりは夜眼には夜の魔人の奇怪な一本の足の様につつ立つていた。太吉はその杉の木よりに建作を見かへりながら

つものくせておづ／＼と口を切つた。あたりはしんと静まりかへり時たま枯葉が風にさわぐ位であつた。

「誰もいねえ様だし……おらあ實はお前の前だから話してしまつたが……おらあ今夜迄、どんなにか聞いてもらいたかつただが、誰が誰でもない話しさ聞いてくれるもんがあつたら思ひつきりぶうまけてしまひたかつた。けど今迄そんでいて、おらあにはどうしても思ひ切ることが出来なかつた。おらあ野良さ一人きりの時は何ぼ泣いた日があつただか、でもおらあ家さ歸りおつかあや子供を見ると、けるつと忘れてしまつた様になつて何にも云へなくなつてしまつた。そんな日が何年續いただか……建さおらあお前の前だから云ふだが今の小塚の者ぢやねえだ。こういへばお前は驚くだらうがおらあ花木の齋藤さ弟だつただ。二十の時今の家さ死んだ親父にもらはれて來ただ。そんでおらあ今のおつかあと一つになつただが、實は話はおらあが

養子さ来る前の事だつたんだ」

驚くよりは先に寧ろ今更何事か知らないが、養子時分の話をし出す太吉の方を建作は奇好としか思へなかつたし興をそそつた。それはそうであらう、今の今迄太吉が養子だつたといふ事が妙に今の太吉にはびつたりとしなかつたからである、それ位に太吉の日平は落着いたものによそ眼からは見えたからであつた。

「實は、ここさ来る前おらあには夫婦約束までした女があつた。話さしついでに云ふが女は雪といつて隣の大林の雜貨屋の娘だ、確かそんな時は十八だつたか。おらあ忘れもしねえだが、そんな年の十月十五日だ隣村の祭りに二人でいつた時だつた。雪が急に子供が出来ららしいとおらあに云つた。てんがけ會ふそう／＼だしそれにまさかとも思つたりしてそんな時は何とも分別出来ねえなりに別れたが家さ歸つておれこれ考へても、どうにも思案に及ばねえ、日はそのうちにたつし、雪からはどうすんべせがれ

るし、ちやいつその事一諸さなれば、どうにか

なんべと思つてよ、おらあ一つにおつ母から親父に話さしてくんろいつた。雪の方の親はそんなでもないだらうとの話だつたが、どうにもおらあ親父は許してくんねえ、そんながりぢやねえ、親父の基友達のよ今の死んだ親父に話さしたらしいんだ。ちや太吉さおらあにくれる、女の方は何ほでも話さつくならその方がよかべ、そんな話さなつたらしいんだ、親父はおらあを呼がなり女の事は何とも云はねえ中に唯養子さいけといふだ……。まあそんな時の詳しい事はぬきにしてとに角おらあ漸つとの思ひで、ここさ來ただで来るなり今のおつかあをもらはせられた。雪はそれから子供さ産むと産後、ふだんもそう丈夫ぢやなかつたが、出血がもとで死んだ。子供はそこでそのまま育てたが、何でも今年てきつと二十四にはなつてゐる。欠子といふだが戦争中は女學校から東京さ工場へ動員でいつてたが、一旦終戦でかへつたが又そこさ

勤めるとかで出ていつたきり、それつきり何のさたもねえだと云ふ事を入づてに聞いたのが一昨年の八月だ。今の話しぢや一時日本橋の小傳馬町とかのある無職業屋、何でも炭木とかいふ家の下宿さしていたつて事は聞いたが……。おらあが親父だとはどういへねえでも、おらあにして見れば子供は子だべ、實の親として責任はおらあにあるだ、何時か行くべ／＼と思つてゐる中につい都合さつかねえて今になつてしまつた。けど又今更おらあお前の親だつていつたつて、どうしようはねえ事だとは思つたがよ、何んな事さしてるか病氣はしてねえだか、苦勞してそれこそはパンパンとかさなつてしまつてるのぢやねえか、おらあ家さ野郎がしつかかりしてくればくる程寝ても寝つかれねえ氣持になつてな、まあ話つあこれつきりだがな勝手だが若し都合さついたら願ふべえと思つたもんで恥かくつもりでお前に話した。都合でいい唯よそ眼でいい見で来てくんめえか。工場での

大正電信電話株式會社つて本社は日本橋さいつた。な建さおらあ一生の願えだ。小せえ時見たつきりで、はつきりは云へねえだが、何でも顔位は雪さ似てるて話だから、細面で眼えは割合はつぱりしてゐる方で、何でも耳えさ少せえぼくろさあると聞けるだ。そんなにそう／＼何でも人がよくあの子の片笑くばは可愛らしいといつたが、まあおらあに想像出来るつてばこん位のもんだ」

太吉はいひただけ思ひ切つて云ひ盡したといつた與奮の後にくる疲勞、そんなやつれた面れでも一應は安心はしたといふ様な一寸した面もちであつた。「さうか……」建作は聞き了はつて、ぢやなるべく都合してと言はうとした瞬間、ひよつとひそ／＼語る人聲に氣がついた。聲の主は本殿の裏手らしい、とつさにかがつて見るには見たが人影はなかつた。唯人聲だけは静かな夜氣につつまれて割合にはつきり傳はつて來る、誰々の聲だかは見當はわからないが

村の若者、而も男と女の二人らしくはあつた。

「ほお……」思はず建作につりこまれて一瞬太吉の耳もあたりの夜氣にのまれていつた。

「何だか夜つていいけどやな所もあんな」男の聲「ええなんぞ」と女の聲。

「だつてそうだべ、晝間と違つて夜はくついで歩けんべに……、そりやいいだがよ、けど人と會ふたんびすかして見られたり、のぞかれたりしてよ、おらあ何だか恥かしくてな」

「うん、だけどおらあ夜のがいいな、ゆつくり話さ出来んべに」

「うん、そりやそうだな、けどな輝ちやん」女は輝といふらしい、でも見當はつかない。

「なあに」「あのな、ほれ瀧口の治作さ處の建さんな」「え建さん、うん今度代表で東京さいくつていつたつけなありや明日だべ」

「うん、それはそれとしてよ、あの建さん……お前知つてるか、この話さ役場の戸口さんから聞いたがな、お前誰にも云つてはなんねえぞ」

「おらあ誰にも云はねえよ、何かそんで建さん」

「いや何つて譯は別にねえだがよ、あのな建さん、ほれ大林に園田つ家あんな、建さんあすこの者だつてよ、くはしくは知んねえけんとな何でも園田さ奥さんの秘密子だつて話だ」

「へえ、それ本當」「本當だとも、はつきり戸口さん、おらあに言つたで……人つてわかんねえもんだな」途端に建作は悪氣が全身を走るの覺えた。空耳だ、そんな俺が園田の子だなんて、而もあの奥さんの。悪魔のよまよい事だ、けどいや／＼俺ははつきりこの耳で聞いた、嘘ぢやない。ふと振返つた建吉は太吉の面にも奇妙な影が走つてみひろいた、その眼は闇の一點を見つめているのを見た。建作は無意識的に頭を振つた、併しかの人聲は正しく聞えて來る森影の合間にはすと青白い田島の山の尾の線が暗青のキャンバスに塗られたぐらに塞々と引いていた。

「園田の奥さんに、子供がなくなつたでな急に

近頃建さん、どうしても戻さずにはいらねえといつてるだよ」と男。

「ぢや美代ちやんべ可哀想でねえか、美代ちやんたら何時もおらあ達と會ふたんびに何とか、かんとか、いい兄さだ／＼と始終いつてるだになあ」「んだな治作さ大變だべな」本當に聞える、いや聞いた、この耳で。建作の心のとうきは既にはげしく身をゆすつていた。本當なのか嘘ぢやないか、いや、こんな月のいい晩に人間は嘘なんかつけるものか、自然彼の足は聲の方に向いていた。

「どこえ、どこさいくだ」太吉も後を續いた、と急に「いやいやよ」「いぢやねえか」

「んでも」「……でも……」二人は道に返つて來ていた。

胸のどうきは愈々高まる許り、建作の心は木の間がくれに、うつつては消え、消えては移る目を追ふ様に、見擴いた眼は、その心のいらだちに充血していた。「建さ」太吉は建作の兩肩

に手をおくなり、その面をのぞきこんだ。

「小父さん、おらあ歸るだ」既に建作は急ぎ足になつていた。がける様に彼は森を去つて行くヘレンの逃亡の如く闇をぬひ青白い世界の中を、いつ果てるとも見えぬ森の山の尾の果へと漸つと氣がついた様に歩き出した太吉の前に、はや鎮守の森は盡きていた。

「小父さん東京さ行つてくるからな、心配しねえでな……」

凡ろく泣いている様な建作の聲が、青白くうつる太吉の面に耳元に白夜 響いて傾つて來た太吉の面は無残な程に青白く月の中にゆがんでいた。(次號につづく)

ありのままた

大宮支店 劬 兒

「床屋へ行きたいんだけど……」私がそう云ひかけると帳場に座つていた番頭



は持つてゐた筆を置いてもみ手し乍ら

「床屋で御座居ますか、御客様が御入りになり  
ますやうなきれいな床屋は御座居ませんが……  
ええ、この前の道を右へ一町ばかり行きますと  
左側に遊樂と云ふ一寸した小料理屋が御座居ま  
す、そこに小さな横丁が御座居ますから、そこ  
を御入りになりますと一軒御座居ます、へえあ  
まりきれいで御座居ませんが……」

「ありがたう」

番頭の長つたらしい説明をお終りまで聞か  
ないうちに私は表へ飛び出してゐた、頭髮が大分  
のびたと無精な私がやうやく気がついた程、私  
のこの温泉町の逗留が大分長くなつてゐた。

季節はづれのせいもあるが鄙びた町の通りを  
番頭から教はつた通りに行くとしたしかに一軒の  
床屋があつた、形ばかりの赤と白の小さな廣告  
が忘れられたやうにポツンと置かれてある店の  
構へは、始めは綺麗であつたらうペンキの色も  
すつかりあせて所々うすぎたなくはげてゐる。

私は、たてつきの悪いガラス戸をガタビシと

音をさせて中へ入つた、そして聲をかけた晝間  
なのに中は薄暗く待つてゐる客は勿論、やつて  
もらつてゐる客は一人もなかつた、なかなか店  
の者が出て来ないので（そのくせ奥の方では何  
をしてゐるのか子供達の聲が聞える）二、三度  
大きな聲をかけるとやつとわかつたらしく「は  
い」と蚊の泣くやうな返事をして四十位のやせ  
た女が口のまはりをよごれたエプロンでふき乍  
ら出て来た。

「やつてもらえますか」

「私が聞くと女は、あわてゝ取つてつけたやう  
に椅子の薄つべらな綿のはみ出した蒲團を置き  
直したり、散らばつてゐる毛くすなどをはき集  
めたりし乍ら

「どうぞこちらへ」

と云つた。

私が椅子に腰をかけると奥では遅い晝食をと  
つてゐるらしく、それにしては賑やか過ぎる子

供達の聲が筒抜けに聞えて来る。あんまり客が  
来ないので無精をしてゐるのか、私の首のまは  
りに巻つけた白い布は、垢黒くなつてゐて毛屑  
が布の穴に突立つてゐる、私は私の前にある大  
きな鏡に私の顔が不愉快さうにゆがんでゐるの  
を見た、用意が出来ても主人が出て来ないので、  
この女が私の頭をやるのかと思ふとますます不  
愉快になつた、一體この女の腕は、たしかなの  
かしらと私は不安になつた。それでも私は、久  
し振りに聞く缺の音に耳を傾むけてゐると。

「ああちゃん」

と店と奥との境になつてゐる破れ障子を開けて  
三つ位の女の子が出て来た、大きな鏡にうつつ  
た女の子は、顔中を飯粒だらけにして、ヨチヨ  
チと仕事をしてゐる母親の方へ歩いて来た。女  
は仕事の手を休めてふりかへつた

「アラ、よつちちゃん、おまへもう食べちやつた  
の、いい子だからお姉ちゃんとお遊んでね」

女は抱き上げた子供を奥へ運んで

「とみ江」何してんの、よし子お店へ出しちや  
駄目だよ、お客様があるんだから……」

破れ障子を締めた。

「はい」

間延びした聲が遠くの方で聞えた

「よつちちゃん、こつち〜いい子だから、こつ  
ちへおいで、ねえ」

姉らしい聲がして女の子の相手としてゐるらし  
かつた。

「どうも済みませんでした」

女は、心持頭を下げて又仕事にかかつた

「大變賑やかですね」

少し皮肉かなと私は思つた

「賑やかどころか、うるさくて」

女はそう云ひ乍ら忙しく缺の音をさせた、た  
しかに騒さすぎると私は思つた、尤も私の生活  
はあまりにも静か過ぎる。當人にとつてみれば  
第三者から見ると程さう騒さく感じないのかも知  
れない。

刈上が終つて顔剃にかかる前に剃刀をいであつた女は急に泣き出したさつきの子の泣き聲を聞きつけて

「織男、またお前は、よし子を泣かしたね」  
奥へどなつた

「おれぢやねえよ」

ふくれた男の子の聲が聞こえた、急に泣き聲が大きくなつたと思つたらさつきの子が涙と涙でくじやく／＼になつた顔をして出て来た、又来たかと私は思つた。

「織男、よし子と遊んでやらなければ駄目ぢやないか、お前昨日の宿題をやつたかい、明日先生に上げるんだらう」

女は、椅子の上に寝てゐる私の表情を氣にしながら云つた。

「おれぢやねえつてば」

男の子は、奥からふくれつ面をのぞかせた。

「誰だつていいから少し、よし子を外で遊ばせなよ」

本當に仕様のない子だと云つた氣に女は、私の顔に石鹼をなすりつけた、その勢あまつて石鹼が私の鼻の穴に入りさうになつた。

「よし子、こつちへ來い、表へ行こう」

母親の足へまとはりついてゐた女の子の手を無理に引張つたらしい、

「いや／＼、ウエーン」

止んだと思つた泣き聲がまた大きくなつた。

「亂暴にするんぢやないよ」

たまりかねたように母親は、剃刀を持つた手で男の子の頭を打つた。

「ちエー」

男の子は、そのまま表へ飛び出て行つた、カタカタと鳴る下駄の音が忽ち小さくなつた、この調子だと今晚母親に叱られるなと母親の前に小さくなつた男の子の姿を想像してみた、然しそれにしても、この店の主人はどうしたのだらうと私は考へた、病氣か、それとも遊んでゐるのか女はその後姿を見送つてから、黙つて私の顔

をあたり始めたが、自分の足にすがりついてゐる子供が邪魔になるらしく又奥へ聲をかけた。

「とみ江、後片付けが済んだらよし子を遊ばしておくれよ」  
「うーん」

「はーい」が「うーん」に變つた。

「男親が居ないから云ふ事を聞かなくて」

女は、愚痴のようにこぼし乍ら私のあごに剃刀をあててゾリゾリと音をたてた。

「御主人は、亡くなられたんですか」

私は押さへられたあごを動かした、女はそれに返事をするかほりに、丁度出て来た十四五になる女の子を見て

「よつちやん、いい子だからお姉ちやんともう少し遊んでてね、とみ江よし子の鼻を拭いてやんな」

さう云はれて女の子は一寸顔をしかめたが「よつちやん、いい子ね、チーコーて、もう一回、ああい子になつた、さ、カツコはいて」

女の子は姉の手に引かれて

「ああちやん」

と聲を残して外へ出て行つた。

さすがは女だと私は思つた、が同時に私はそれは女だけに當前と云へるんぢやないかと思ひ直した、何れはその身體の中に子を宿し、子を生まなければならぬと云ふ課題を負はされてゐる女の宿命が十四五の少女に女を自覺させた結果に外ならないと云へるのではあるまいか、男にはそれが無い、私も織男だつたら、きつと佛頂面をしたかも知れない、「はーい」が「うーん」に變つてもとみ江は母親を満足させた。女は男の持つてゐない優秀な武器を持つてゐる然しこの武器は宿命的な課題の前にもろくも自らを放棄してゐるのではないだらうか……と私は考へた。

やつと靜かになつた店の中で女は黙々と私の顔に剃刀を滑らせた、このやうな私の見解は、勿論全部の女に、母親と云ふ母親に、適用され

るものではない、然し……止さう、面倒くさい、こんな事を考へる爲にわざ／＼こんな山の中へ来たんぢやないと私は思ひ直した、しばらくの間剃刀の音だけが静かに聞えた。

やがて女は椅子を重さうに起して、「どうも御待遠様でした」

と私の前に頭を下げた、私はやれ／＼と云つた氣持で料金を拂つて表へ出た、店の前へ遊んでゐた女の子は、表へ出た私の顔を無表情な顔付で見つめてゐたが

「よつちやん」  
と呼ぶ母親の聲を聞きつけて

「あめちやん」  
今にもころびさうな恰好で店の中へ入つて行つた、子供を抱き上げだらしい母親の意味のない言葉や笑ひ聲を耳にし乍ら今から宿屋へ歸つても夕飯には大分時間があるなど空を見上げた私は、しばらく散歩する事にきめた。

(四八・六・廿九)



### 朽葉

大宮支店 松本 桂秋

亭は薄暗い四圍の正面に僅かに鈍く光つてゐる黒板に、うつろな眼を先刻からそ、いでゐた永遠、偶然、類型、資本主義、非連続の連続、そんな文字が散在しその間を縫つて英語や、獨逸語が走り、それは確かに熱のある經濟史の時間に相違無かつた。しかし亭は出さうな欠伸をこらへ乍ら、もう、とうに授業の時間を過ぎてゐるのに講義を續けている教授の聲が耳に入らなかつた。暗くなつた廊下を時々過去の足音や自動車警笛に耳をそばしたりして「チラツ」と教授の方に眼を投げると、その視線がびつたり會つて反射的にノートをめくると自分でいさゝか賑くなつて視線を右の席に投げたりした。そして、銀行の人の名前を一寸左の手の甲に書

いたりしながら、ペンの滑りを直して氣の進まぬノートに向つた、「では……」と教授がドアを開けて去つた後は、授業時間をとうに十分は経過してゐた。

バタ／＼としきり教科書やノートを閉ぢる音に教室は擾亂されてゐたが、亭はずばやくノートを片付け静かに立ち上がると、ゆつくりと煙草の火を付けて薄暗い階段を二歩一歩下りて駿河臺をのぼつていった。

「やつぱり務め乍ら勉強するといふ事は……そしてその學問が……」さう考へ乍ら結局は今日迄ぐ／＼になつて銀行の退けるのを待つて家へ歸る氣もせず、夜間の學校へ入つて授業に出たものゝ、職業と勉強がめちや／＼なアラベスクをなして分らぬまゝで、今迄過ぎてきた事を不甲斐無くもあり、又悲しくもあつたりするのだつた。終戦、復員、就職、そして此處に二年有餘、學校でも銀行でも、毎日々々の仕事に力

第一黒木と言ふ男は、彼の書齋にはぎつしり

一杯精出してゐる人を見ると、あゝいふ風に生きてゆける人間が一番幸福でもあり逞しい生活をひし／＼と感じる亭であつた。亭の考へてゐる事一つ／＼は彼自身はつきりと自覺してゐる事であつた。それは何時か黒木が「君は意氣地が無いよ。それは中途半端な學問が大きい障害をしてゐるんじゃないかい。夢を持つ事はいいさ思ひきり戀愛でもすれば青春の悔みそんなものは吹飛んでしまふさ」。「けど、戀愛なんて……」「だつてそんな年ぢやないつて言ふんだらう、だから若さが無いと言ふんだよ」こんな言葉の節々にもお互に學生時代を過して來た、數年前との親友黒木との今に至つてお互に離れていつた感情の不調和は隠す事が出来なかつた。併し亭は何事につけ彼を慕ひ交際は心よく續けていた。

と新刊の書物がつまつて、それを要領よく讀んで賣り取ばし、又新刊書を買ふといふ人間でそれによつて彼の知識欲は充されていた。それに比べると亭は常に一つの事にこだはり、乏しい決断力も手傳つて一つの本をかみくだくやうによく讀み、そしてそれについて何時迄もいつまでも思考する男であつた。だから彼の本棚には偉大な書物がきつしりとつまつていてといふ現象は見られなかつた。彼に於ては思考と讀書とは、むしろ前者が重きをなしてゐた、友人と話していても彼はふと目をそらして考へこんだりする事が、しばしばあつた。「俺はもうこんな生活には耐へきれない」さう考へが決まると何もかも駄目になれと捨鉢になり乍ら彼は停車場からさすが人通りの少い聖橋の方へ歩いて行つたが、ふと思ひ返して家へ歸る決心をした。黒木への羨望、それは亭の觀方だ、黒木に言はせれば亭への羨望、それですべてが解決つくではないか、一體どうして自分ばかりつまらぬ

いや、亭にすれば人生問題は大きな苦しみた。しかしその一つ／＼を分析すれば大した問題ではないんだと思ひ乍らも、現實はさうは許さなかつた。何時の間にかぼんやりと考へている中に、浦和驛へ近くなつた事を亭は知る、と浦和の黒木の家へでも寄つて昔話でもして氣を紛らは相と黒木の家を指して急いだ。

未だ晩飯が濟んで間もないと見えて取り散らかしてある六疊に通されると、二人きりの世界が此の上もなく樂しかつた。「學校の歸り？」  
「うん」  
「面白い？」  
「うん」  
唯味氣無い返事をしてゐるのに氣が付くと、亭はやつと思ひ出した様に頭を搔きはじめた。「まあ飯でも食つて行けよ」と言はれて一寸位遅くなつても亭は腰を据える覺悟をした。黒木の家は平家の六疊に八疊に十疊、東南に縁があつて外部は雜木林である、澄み切つた月夜になつて、虫の音が靜かに聴えてきた。

黒木は今會社へ出て月に一、二回は逢つて

話はしてしたが、學校時代の話それに文學や新劇の事以外は餘り語らなかつたが、亭の氣持は中學時代と専門部時代の八年間に打てば響くやうに分つていた。だからこの友なら何でも打明けられるこんな時にこそはと、彼は靜かに口をきつた。「俺はなあ……」亭は一口言ふと、ふと立ち上つて縁側にあぐらをかいた。さうだ、矢張りぶちまけやう、さう思つた。「俺はなあ二、三日海岸へ行つて暮してみろ積りだ、駄目なんだ、もう何も出来無くなり相なんだ、勿論苦しまない方法はあるが思ひきつて遊び廻れば時が解決して呉れる、併しそれは卑怯かもしれないが」「おい」始めて黒木が唇を開いた。「そんな事を言つても君がそんな風に出来無い事を俺は知つてるよ、とも角、君が女の事どうしたとか、されたとかいふのなら、俺は笑つて君に説諭したり援助したりするかもしれない併し、今の所君に僕は何もいひ度くないんだ、靜かに考へてみる、それが一番いい。」黒木は

しづかに言葉をきつた。雜木林に面して据つてゐる亭の肩が、しづかにふるへてゐるのに氣が付いた。しばらくの静けさの戻つた部屋に、黄金虫が飛んで來た、亭は嬉しかつた、職業も、學問もほうり出して海岸へゆく我儘を許して呉れ、何も禮を言へない友だ。言へば何を女みたいにと頭から怒やしつけられる、亭は一刻も早く此の地を離れたい矛盾に涙が頬を傳はつた。

黒木より中河亭への手紙

「試験は練習である。與へられた悲劇は慘たる宿命であらう、しかし之を自己の眼の中にじつくりと見守り寂々乎として反省する時、それは試験と形をかへて人格向上の投石となりはしないか、過去に於いて、人間は自己の歴史を葬るのには、現在まで自己の束縛を斷ち切るをもつてした。相手を葬る事により、或は自己自體を葬る事により、彼らは過去から自己を自由にした。」

そして自己の存在を新たに形成せんとした。それが悲劇な宿命に襲はれた時の彼らの手段でありえたのではないか。しかしそれは現在では許されない。共に生きて行かねば、例へば自己を取り巻くものが構成してきた石を假令取りくづしても石自體は残るやうに。

自殺はこの意味において社會にとつては勿論自己において何等自己の生命の切斷ではありえず、宿命ならざる試練の前に自己を無氣力にした點において悪である。

人間は寂しくも愉しき圓を描きつゝ相集ひて永久にめぐる煙ではないだらうか？ 煙は時として太く時として細い照り映える陽によつて時には紅く時には紫であらう。

併し、中河、忘れないで呉れ、煙は常に蒼穹に昇つてゆくのだ、苦しい寂しさを感じるのは君一人ではない、しかし感ずるのはそれが必ずしも事實であるから感ずる場合のみではない、又多くの人々がそれを苦しんで来たといふ事は

君の立場を同情的に肯定さすものを多分に含んでゐる。

むしろ俺はさう思ひ込んで宿命の前に自己を斷定しきらぬ所に、君の考へる輩としての存在を認めてゐる。勿論俺は君が巖頭に飛び込む事を考へて、こんな事を書いてゐるのではない。君の苦しみは人生の試練だ、俺は清く描かれた偶像を禮拜するよりも、怒り狂ふ會社に人間と共にすべてを捨て、生き抜く人間の美しさを味はひたい、君の現在の逃避は、決して目的ではないんだ。

早く歸つて来いよ、さよなら。」

黒木の手紙を受け取つた亨は、健康な彼の現在の精神を想つた。

しかし、既に船は立つてゐる、針路は正しいと亨は思つた、唇が顫へ眼がかすんだ、足許の僅かな草が、さつと斜に走つた、踏みしめよう踏みしめようと思ひ乍ら亨は足の浮き上るのを感じた儘、氣を失つた。

黒木は相變らず會社へ通つた、しかし一週間と経たぬ中に、亨の死がもたらされた、知らせの電報で黒木が海岸へとんでいつたのはもう夕方近かつた。

彼は靜かに亨の顔の上の白布を取つた。

血がひかれて唇は固く結んでゐた、合掌すると居たゝまれず、旅館の裏山へ行つて、慟哭した。

「お前、何といふ事をして呉れたんだ、取り返しのつかぬ事を、一つしかない生命だつたじゃないか。」腹の底から悲しみと怨みがこみ上げて、世の中が眞暗に薄れてゆくを感じた。

併し、まさか死ぬ氣で来たのではないだらう死んだのではない。俺はお前が死んだとは思はない、生きてゐる、お前の苦しみ、俺の心の中に生きてゐる、俺は死なない、俺は生きるぞ、さういへば、お前は此處へ来る前の晩たしかに泣いてゐた。

しかし、如何にしても自殺である、とは信じられない、そしてその否定の背後には、彼が送つた手紙の事が襲つてきた。

亨に俺は考へさすべきではなかつた。古人の歩んで来た道を彼に示して徒なる苦しみを、軽く解決さすべきであつたのではないだらうか。

しかし、俺には彼の苦しみが些細なものであるとは考へられなかつた、亨は内面から建設せねば、決して立上れる男ではないのだ。

翌日、遺骨を抱いての歸り、汽車の中で黒木は亨の銀行の友人と語つた。「彼は一寸神經衰弱氣味だつたんですよ、しかし、あゝいふ状態で海岸へゆくといふ事は憤しむべきぢやないでせうか。僕は青年が、いゝ加減なごまかしの上に人生觀を立てるといふ事は、動物にも劣ると思ひますが、その點中河君は偉いと思ひますよ、死因に對しては何も言ひたくないですね。しかし、こう雨が降つてゐる日等は、彼を思ひ出すと、たまらなくなるんですよ。」若い行員は多

くを語らなかつた。二人は走る列車の中から雨の窓外に眼をやつた。

「宿命だつたかも知れない。」突然、銀行員は口を開いた、黒木はぐつと奥歯をかみしめた、豪然と降りしきる雨の音の中で、黒木は窓に顔をすり寄せて、心の中で大聲で叫んだ。

「宿命でない！ 宿命だなんて……。」

激しい呼吸が列車の走る音と風と雨に消されていった。(終り)

## 揆 音

本 部 董 水

街路樹のわくら葉がひらひらと舞つて、佐竹春雄の居る事務室の窓際を掠め過ぎた。その茶褐色に染つた街路樹と、ビルの稜線の間から、深く澄んだ秋空が覗いて清々しかつた。

晝休みの一時、同僚が揃つて散歩に出た後の事務室は、ひっそりと静まりかえり、大都會の

雑踏の中にも、こんな一瞬があるのかと思われ  
る位で、獨り居残つた佐竹は、ゆつたりと机に  
凭れて、何か思索に耽つてゐるような眼指で、  
コバルトの空を凝視してゐた。

すると、いつの間にか、會計の堀君が近づい  
て来て聲を掛けた。

「佐竹君、今日は晩くなるよ。」

「え、どうして？」佐竹の空想は亂されて、現  
實にかえつた。

「うん、今夜宴會だよ。」

「いつもの所か！」

「いや、今日は一寸違ふ。君も知つてゐる筈だ  
何んとか云ふ清元の師匠が經營してゐる、そら  
俗に藝人會館と云つてゐる三樂なんだ。なにしろ  
あそこは藝人に優先權があつて、普通の人は  
紹介がないと引受けて呉れないさうだからね。  
それで社長も、明日が三週年なので前々から奔  
走して居られたらしいが、先方の都合で今日宴  
會といふことになつたらしい。今しがた社長に

呼ばれて言い渡されて来たんだ。」

散歩から歸つて来た一同が、この話を聞くと  
急にざわめき出して、夫々準備に取り掛つた。

會社と云つても堤興業は、終戦後出来た新興  
會社で、社員は全部で二十人足らず、堤社長の  
個人經營も同然で、不思議とよく團結して業績  
も良好だつた。それといふのも、社長の仕事熱  
心はさることながら、どこか親分肌の所があつ  
て、人心收攬の妙を心得、思いやりも深いと云  
つたような點が人氣に投じて、人望があり、い  
つも社内には活氣が漲つてゐるからで、斯うした  
會社特有の宴會の數も多くその都度、社長得意  
の歌澤に始まり、隱藝のオン・パレードで賑や  
かに終幕するのが例になつてゐた。その中で佐  
竹だけは、入社後二年になるが、歌一つ唄つた  
ことがなく、今では無藝といふことに折紙を付  
けられて了つた。それでも宴會が嫌でもなく、  
隱藝に移ると熱心に耳を傾けてゐた。

四時近くに車が来たので一同思い思いに乗り

込んだ。車中には一升瓶が幾本も持ち込まれた  
夕陽が窓ガラスに反射してキラキラ光つた。

二臺の自動車も、同じ間隔を保つて、建物の  
間を暫く廻りくねつてから郊外に飛び出すと、  
小砂利を敷いた道路になつて振動が激しくなつ  
た。窓外の風景は、秋色漸く濃かと云つた調子  
で、土手の裾には薄の穂が霞のように白く棚引  
き、軒端の葉鶏頭が眼にしみる位い眞紅に燃え  
てゐた。

黄ばんだ雑木林に添つて右に折れると、前の  
車が降り、後の自動車もこれにならつて止つた  
社長はもう車外に立つてゐる。

草葺屋根の門を入ると、林をその儘利用した  
らしい広い庭が續き、花壇には色々な菊の花が  
咲き亂れてゐた。その奥まつた所に二階造りの  
古風な建物があり、噂さ通り閑靜な場所だつた  
玄關に着いた時、自動車も引返す音が聞えた。

女中の案内で二階の一間に落付くと、茶が運  
ばれて来た。堀君が「静かな所ですなア」と獨



言のように呟くと、「本當に閉静だ」「こんな良い場所があるとは知らなかつた」等となかば社長の好意に對する謝意を含めて、皆んなが調子を合せると、社長は苦心の甲斐があつたと言はぬ許りに上機嫌だつた。雑談に花を咲かせてゐると、「お仕度が出来ました……。」といふ女中の聲に、救われたような軽い時めきを感じながら隣室の廣間へ崩れ込んだ。

庭へ下りて、秋色を眺めてゐた佐竹も呼び戻された。佐竹は演藝が始まると、何時も自分の所で一時跡切れることを知つてゐたから、末席に着こうとしたが、堀君の傍へ坐らされてしまつた。

電燈が灯つて部屋がバツと明るくなつた。會開始の合圖のように、白い徳利が、幾本もお盆の上に薙めき合つて現われると、それを女中が手ぎわよく要所々に配置した。床の間の花籠には白菊がいけられ、芳香が部屋一杯に匂つてゐる。その菊を背景にして社長が「さア始め

よう」と聲を掛けると、伏せつてゐた盃が顔を持ち上げ、次ぎ次ぎに酒が注ぎ込まれた。

社長の挨拶が終ると、盃と徳利が急がしさうに動いて、カチャヤ々とあつちこつちで聲を立てた。斯うなると自然此の一角に城壁が出来て獨特の雰圍氣を醸し出し、盃が器用に指先を傳つて移動し始める。社長の膳には早くも三つばかり溜つて、快活な笑聲が部屋の空氣を震わせた。食器の音、談笑する聲が湧き起つて、刻一刻賑やかになつて行つた。女中は、酒や料理を運ぶのに、天手古舞を始めた。その女中に混つて、一人垢抜した娘が皆んなの眼に付いた。

部屋の隅にゐたカネ一君一放送局で鐘を一つ貰つたとかせ、誰かゝ銘名したのだが――そのカネ一君が、早くも身許調査を始めた。名は惠子此所の師匠の内弟子で近く名取になること等を訊き出すと、早速一同に披露した。是非一度拜聴したいと言ふ聲が方々に起ると、社長もその氣になつて、女中を介して交渉してみたが、今

日は手が放せないからといふ返事に一同残念がつたが「それは社長一つ……。」と堀君が水を向けると「では始めるかね」と自信ありげに頷いて、例の歌澤を唄い始めた。場所のせいとか、今日の出来は上々だと皆んなが思つた。それが

ら順番に藝能大會が繰り廣げられた。カネ一君の歌謡曲、端唄、都々逸と續いて遂に佐竹の番になつてしまつた。「もう何か覺えたでせう」「一寸でいゝから一つ」こんな聲に混つて「いづも喰逃はひどいなア」下品な彌次が飛ぶと、ドツと笑い崩れた。「佐竹君をいぢめるのは可哀想だよ」社長の靜かな聲だ。社長は佐竹に何も期待してゐない風だつた。

所が意外なことが起つた。今迄俯いてゐた佐竹が顔を上げると、「お耳障りでせうが……。」と言つて、ちらり堀君に視線を投げながら立ち上つた。まづたく意外だつた。好奇心と激励の拍子が渦巻いた。

85 佐竹は、女中に何かひそひそ話してゐる様子

だつたが、女中は幾度も頷いて階段を降りて行つた。佐竹が何を始めるのか見當がつかなかつた。中には、手品の種でも取りにやつたのではないかと想像するものもあつた。

女中が、大事さうに三味線を抱えて上つて來た時、一同はアツと驚いた。「佐竹君こわさなようにして下さいよと。」又半疊が飛んだ。佐竹はそれには耳をかさず、靜かに三味線を受取ると、絲の調子を合せ始めた。何時もの佐竹とは様子が變つてゐた。惠子はどう都合したのか上つて來て、座敷の隅に、しとやかに控えてゐた。

三味線を持ち直した時の態度は、不思議と板に付いてゐた。揆が動く、快音が部屋一杯に響き互つた。指のこなし、揆捌きも鮮かに、一音又一音。冴えた音色、旋律の妙。一同は何時の間にか引込まれて、耳を傾けるようになつた。嫺々として流れる、その揆音にも増して、鮮麗された美しいのど。

「……たとへこの身は淡雪と、ともに消ゆるもいとほぬが、この世の名残り今一度……」

唄と揆とがピタリと合つて、濃艶にして氣品ある藝風は、人の心にヒシメ々と迫るものがあった。

澄み亘つた夜空に、月が何時しか高く上つて丸窓に紅葉の葉影がゆらめいてゐた。

二年前の佐竹は、その頃上方でも一流の、宮壽太夫の秘藏弟子として重く用いられ、天分の美聲は寧ろ師を凌ぐとまで噂された。彼は三絃の音色と、唄の一節もゆるがせにせず、豊かな情操をこれに結び付けて、彼れ獨特の藝風を編み出すことに腐心した。師の藝をその儘受繼いだ宮壽太夫は、彼の企てを喜ばなかつた。藝人堅氣の一徹から、不圖、異端者呼ばわりされて佐竹は師の門を去り、上京すると友人の堀君を訪ねた。彼はあくまで自分の信念を貫ぬこうと決心した。然し、先立つものは生活の安定であ

つた。そこで堀君の紹介で堤興業に勤める氣になつてしまつた。

女子供ばかりで、淋しがつてゐた家の離れ座敷を、これも堀君の世話で借受けると、その日から彼の修業が続けられた。風の音、雨滴の音にも耳を傾けた。空間の美を追及した畫家のように、深夜に籠る静寂の靈感を、音色の間に織り込もうとした。

二ヶ年の歲月は、彼の腕を神技にまで押し進めてゐた。その二年の間に、宮壽太夫のことを幾度思ひ浮かべたか知れなかつた。師に對する怨みではなく、自分の輕率に對する悔恨であつた。門を立ち去る時、襖越しに漏れた師の一人娘よし江のすゝり泣く聲は、彼の耳にこびり付いて、佐竹の心を掻き亂すことも屢々だつた。

哀愁を含んだ秋の夜の物淋しさが、彼の心を掻き立て、師の面影、よし江の姿が蘇つて、遺瀕ない思ひに鎖されて行つた。彼が三味線を所望したのは、人に聽かせるためではなく、自分

の心を糸に托して慰めたいからだつた。彼は魂を打ち込み、秘術を盡して演奏した。

揆音の牙え、玲瓏たる美音が渾然一體となつて、云いしれぬ哀調が、秋の夜のしじまを縫つて、窓外にまで流れて行つた。(終り)

## 思ひ出の手紙

本店營業部 美根 男

私は昨日この地に參りました。廣茫たる八ツ岳の高原には早や初冬が訪れてゐます。澄み亘る大氣の彼方には、雪を載いた八ツの連峯が崇高な姿を現はしてゐます。騷音、雑沓、享樂的のものど遠く離れた大自然の靜寂境をさまよふ時、雑念、夢想はあと形もなく消へ去ります。ほんとうに心からの反省を通して湧いてくる名狀し難い希望と理想の充盈感を感じます。

男がある女性を戀する程本能的な喜びを覺へるものはありません、私が貴女と上野の森を始

めて逍遙した思出は餘りにも印象的です。別にこれと言つて話し合つた譯でもありませんのに暖い御互の心が無意識の中に通つた様に思ひます。貴女の全身をとらして感ぜらるゝ知性、清楚な美しくしき、又女性らしいやさしさは私の心にどんなにか訴へた事でせう。この微妙な感情の交錯はどんな理論の武器をもつてしても分析しうるものではありません、人間は元來理性的な動物であるとの事ですが、理性では割り切れないこの非合理性をこの時程痛感した事はありません、私はたしかに戀を感じました。

戀とは何んでせうか、戀愛は若き日のシンボルとして、美しい眞珠の玉として客觀的に把握しうるものでせうか、ある人はこの思ひ出を美しくいものとしてそつとして置きたい、その爲には結婚といふものとは嚴密に區別すべきだと申します。純理論的な面からはそれもよいでせう。初戀程強烈であり純粹なものはありません。しかしこの思ひ出を一生胸に秘めておく爲

私は昨日この地に參りました。廣茫たる八ツ岳の高原には早や初冬が訪れてゐます。澄み亘る大氣の彼方には、雪を載いた八ツの連峯が崇高な姿を現はしてゐます。騷音、雑沓、享樂的のものど遠く離れた大自然の靜寂境をさまよふ時、雑念、夢想はあと形もなく消へ去ります。ほんとうに心からの反省を通して湧いてくる名狀し難い希望と理想の充盈感を感じます。

男がある女性を戀する程本能的な喜びを覺へるものはありません、私が貴女と上野の森を始

に結婚しないで暮すといふ事は現實にはあまり考へられません。どうかといつて別に他の人と結婚するならばその結婚は、眞の愛情の生活ではなく不純なものとなるでせう。私は少くとも戀愛は結婚への必然的な課程であると思つてゐます。戀愛は若人の精神的な喜びであり精神的な陶冶の場であると思つてゐます。戀は盲目ですやゝもすればたゞ性欲的な愛情にのみ耽つてしまふ恐れがあります。性欲的なものは強烈ではあります。永続性はありません。どんな美しくしいものでも、これに慣れるしたがつて感受性にはぶつて参ります。結婚後愛情がうすれたら、形丈の夫婦生活を送つてゐる多くの人を知つてゐます。私は性欲的なものを基盤にして更にそれを超ゆる精神的な結合の存在を必要とすると思ひます。讀書を通して、思索をとうして、音楽、スポーツ等の趣味の高揚を通して御互により高き人格の陶冶をしなければならぬと思ひます。私はジイドの「窄き門」の中に出てくる

アリサの苦惱、身は燃ゆる様な思慕の念を戀人ジエロウムに抱きつゝも、彼の所謂「徳」の完成のために彼より離れんとしてもだへるアリサの苦惱を思ひ出します。私達は精神的に苦しまなければならぬと思ひます。この聖地八ツの山麓にあつて私は今後どうしたら理想的な生活を送りうるであらうか、何にかしつかりしたものを據り所のあるもの、一貫した安定したものを御互の中に植つける事が出来るであらうかといふ事を考へてみたいと思ひます。神聖なプラトニックな愛の生活を有意義に送らんとする私の氣持を御察下さい。

紅葉は終り八ツ岳高原は一面の冬枯です、かつてはその華麗を誇つたであらう高原の草花は今や靜かな冬の眠りに入つてゐます、どうぞ貴女にも御元氣でお暮し下さい。

### 行内野球大會記



東村山支店 間仁田生

第二回行内野球大會は去る十一月十四日絶好なる野球日和に恵まれ厚生課と従業員組合協同主催の下に、頭取はじめ和崎、森田、世川、長島各常務、伊藤、島崎、千葉、田島、佐野各重役臨席し各支店長、役員以下行員多數の應援團参加の裡、各地區代表選手歩武堂々、莊麗なる入場式を行へば大會委員長(頭取)訓辭の後、前大會の覇者東京チームの主將宣誓を行ひ、大會委員長プレートに第一步を印して鮮かなる手捌きを以て處女球を投げれば満場の拍手鳴りもやまず、茲に八時四十分大會の幕は切つて落された。

流石に地區の代表！接戦又接戦を重ね次の如きスコアを以て準決勝に入つた。

#### 第一回戦

熊谷 1 — 0 川越  
浦和 4 — 3 東京  
川口 11 — 2 飯能  
秩父 4 — 3 青梅

茲に於て特筆すべきは昨年の決勝を争つた東京・青梅の失格と川越地區兩代表の敗退は、誠に豫想外であつて、結局本大會は浦和・北兩地區の覇權争ひとなつた。川口・浦和の健闘も空しく堂々たる陣容と鐵壁の布陣を誇る熊谷・秩父の前に屈したのも蓋し當然と云はなければならぬ。

#### 準決勝戦

熊谷 7 — 1 浦和  
秩父 2 — 0 川口

試合は愈々最高潮に達し觀衆亦固唾を呑んで熊谷對秩父の決勝を見んものとスタンドは超満員！兩軍の應援團互ひに應酬、拍手と將に白熱せんし午後二時二十分小島球審のプレーボール

に決勝戦は開始せられた。

秩父の先攻第一回トップバッター若林君、名腕より投下されるスモークボールを何處まで打ちこなせるか、と見る間に第一球を右翼へ痛烈なる二壘打をカットばし守備軍の度臆を抜く、續く打者三振、二者凡退

次いで熊谷軍トップ打者悠々とボックスに入る、細井君も秩父軍島田投手の第一球を左翼へ二壘打すれば熊谷の應援團聲援しきり、續く櫻井君の投ゴロに敵失を得てこれ又一點此の回五番打者往年の名投手關口君大會の初の本壘打を

は打ち、一擧三點を擧ぐ試合は斯くして、

秩父 1100000

2

4A

熊谷 300001A

2

の戦績を残し遂に凱歌は熊谷軍に擧る。試合終了午後三時二十五分。試合時間一時間五分。決勝戦に伊藤投手の得たる三振十本、許したる安打僅かに一本。燦たる記録ではある。

試合終了後大會委員長立つて賞品授興式を擧

行。次の如く表彰せられた

優勝チーム	熊谷チーム
最優秀選手賞	伊藤投手(熊谷チーム)
最高打撃賞	細井選手(同右)
打撃賞	長塚選手(浦和チーム)
打撃賞	關口選手(熊谷チーム)

## 職場スポーツと野球

青梅支店 田村 治平

最近職場の娯樂に對し世の非難をしばしば耳にするが、これは敗戦下の暗い世相が反映し浮薄安易な娯樂のみを送る一部の者への警鐘であり、そして健全娯樂を希求しての職場愛護の眞摯な叫びである。では最良なる職場の娯樂は何か、この間に對し私は先ず健全なるスポーツを推す。私達は幼少の頃より「良く學び良く遊べ」健全なる精神は健全なる身體に宿る」とか

或は「運動は健康の母なり」とかスポーツを通じての體位の上、志操の堅實、共同精神の練成を訓へられ来たが、終は机上執務の我々には此の言たるやに決して等閑に付するを得ないものがある。なぜなれば運動不足に起因する保健の低調は、銀行人の通弊であるが、これが爲疾病に因る幾多の不幸を見聞し、或は亦一部に依然たる個人的觀念の色彩濃くして團體生活に緊要なる相互扶助の精神の欠如を屢見するが故である。斯く觀するが故に、職場スポーツの使命は飽迄も保健であり娯樂を基幹とする處の協同精神の涵養でなくてはならない。

全行員が常に健康で明るく楽しい職場を現出し、融和と協調に結ばれたる團結力あつて始めて行運の進展が期し得られるを思ふとき、職場スポーツの重要性がひしひしと感ぜられるではないか。では職場スポーツに何を選ぶべきか、それに對しては人それぞれの好みに依り種々異なるが、男子行員スポーツとして考へると、既

述の面とスリルに富む津々たる興趣の両面を多分に持つ野球を私は推したい。當行發展の爲に團結力の強化が強く要望されるとき、個々の技倆の優秀性よりも「チームワーク」(團結力)の強弱が即ち勝敗に大きく影響する野球を通じての身心の練磨は、右要望に答ふるに足る一石を投ずるものと信じ、茲に上司の深い理解と協力を切望する。

野球の大衆性は今更私が述べるまでもなく、戦後燎原の火の如き股賑振りが之を立證するが最近種々の面に行き過ぎの傾向があり今や職場の野球も反省期に直面してゐるのではなからうか。即ち職場野球の狙いは勝敗を第二義とする樂しむ野球であるが、本末を顛倒し徒らに勝負のみに抱泥途には不祥時さへ惹起し、或は勝つ爲にはと極端な練習は職分の逸脱を來し、就かれ本勢たるや了解に苦しむ半プロ的チームが見受けられるのは眞に慨嘆に堪へない。彼の社會人野球の最高峯たる都市對抗に此の弊が露れ、

最近識者の誇りを買つて居るのが好例である。職場の野球たる以上「本務第一」が絶対的であり、本務に支障なき範囲内で共に楽しみ體力を練る處に職場スポーツの眞意があり、勝敗に抱泥せず一時を慰安し憩ひ、明日への活力素たらしこることが職場野球の理想たるに留意すべきである。その意味に於て、此度組合にて計畫された地區大會制は意義實に深いものがある。昨年の一部少數選手に依り勝敗を主眼として戦はれた母店對抗から、より多くの行員により而も楽しむ野球へと一步前進せる地區大會及中央大會に私は大なる期待を抱くと共に本野球大會が盛大裡に、職場スポーツとしての眞價を發揮された事は、共に喜び已まないと云うのである。

(二三、十一、十四)



### 大會寸描

(1) 第二回野球大會も無事終了。終始樂屋裏にあつて計畫一切及大會の進行に黙々として盡した人事課の須田君。大會開始と共に「嗚呼もうこれと言ふ事はない。」とがっかりしてしまつたのも無理なからぬ事。

(2) 大會開始前グラウンドの隅でキヤツチボールに餘念のない氣品高き老人。誰かと思つて見れば世川常務。いや近頃の重役はボヤボヤしてはおられないよ、やつぱり始球式にはストライクがスーッといかなけりやね君。」とは大したもの。諸給與も何卒その意氣で。

(3) 常勝將軍東京チーム。第一回戦で浦和チームにうつちやられて、悲哀交々。日本橋の鈴木選手、他チームの準決勝を見ながら「あの審判は野球を知つてゐるのかい？」とはスポーツマンシップを置き忘れた貌。此の様なスナラーがゐては、東京チームも強いこと云へない。(N生)

### 投稿募集に對する注意

- 一、原稿用紙は四百字詰に限りません。
- 一、新かなづかいを使用して下さい。
- 一、字體はハツキリと楷書で書いて、點、丸は必ず一字づつあけて下さい。
- 一、紙上匿名は隨意ですが別に所屬店名、本名をお書き添へ下さい。
- 一、應募作品は何でも結構ですが、論說、隨筆、小説、俳句、川柳、短歌等は特に歡迎致します。應募下さい。
- 一、本誌に關する批評、感想、希望は遠慮なく申出下さい。
- 一、應募原稿は一切お返却致しませんから豫め御諒承下さい。
- 一、原稿の採否、訂正等は編集委員會で致しますから一任願ひます。
- 一、原稿の送り先は左記です。

浦和市高砂町二丁目  
埼玉銀行内  
従業員組合機關誌「銀嶺」編集部宛

### 機關誌編集委員

- 野崎 敏夫 (書記局)
- 關根 正夫 (東京)
- 島田 森雄 (本店)
- 筋野 弘智 (川越)
- 熊本 潔 (浦和本部)
- 土井 一郎 (粕壁)
- 星野 沙一 (川口)
- 野口 米藏 (本庄)
- 小林 三郎 (大宮北)
- 中島 榮次 (飯能)
- 白根 一郎 (忍)
- 田島 敏三 (加須)
- 原島 茂 (秩父)
- 横田 久一 (羽村)

朝日に燦めく銀嶺、其處には生命がり、自由があり、希望がある。虚偽と罪惡の混沌たるインフレ社會の汚濁の中に、ともすれば自らの魂の有り方を見失はんとするとき、吾等はこの正義の自由を讃へ、明日への希望に燃え、清淨そのもの、銀嶺の姿に心の糧を求めて、生活の向上にいさゝかでも役立たしめんと意圖せり。

日本經濟の再建を自負する埼玉銀從組の皆様この銀嶺と共に、お互の腕を組み、心を合はせて、高き理念と親睦とを以つて吾等の銀行を、職場を、より明朗な愉しき日々としやうではありませんか。(熊本)

風船がとんで行く、赤い風船が、きらきら光る早春の空に紅い一點をしるして、ふはりと昇つて行く。僕は五、六十もの風船を買つて来て空に放してやり度い様な衝動にかられて、しばらくそれを見てゐた。我々はこんなちよつとした夢の様な風景も随分長い間見なかつた。百圓札と算盤の音に埋れられたになつた小さな肉體を、かゝえるやうに歸つて來ると、何の夢も見ずたゞ泥の様に寝るばかりの毎日、さうした空白な日記をもうこれ以上續け度くない。埼玉銀行も、もつともつと美しく、もつともつと賢くならなければならぬ。此の「銀嶺」がそのやうな明るい未來の舞臺として我々の前に現はれたことは全く嬉しいことである。必ずやこの「小冊子」が躍進埼玉銀行の睿智となり、明朗埼玉銀行の姿態とならんことを、我々編輯員は確信しつゝ、微力を盡すつもりです。(星野)

### 編輯後記

△日本は文化國家を建設することになつた。現下の日本の状態にあつて、文化の育成向上の爲には、凡ゆる面に困難がある。しかし燒土に萌え出る若芽がある。我々は萬難を排してこの若芽をすくすくと生長させるよう努力しなければならぬ。Cultive—文化—はもともと Cultivate することである。農夫が掩まず掩まず土地を耕してゆくように、我々は銀嶺の勇姿に我々の掩まない開拓を求め向上を求めなければならぬ。創刊號がこの一助ともなれば幸甚の至りである。

△創刊號は豫定より大變おくれましたが、よろう組合員各位の御手許へ御届けすることが出来ました。編輯を終つてあれやこれやと考へさせられる缺點も種々あることと思ひますがこれら缺點は今後の機會に補ふことを以て御容赦願ひたい、本號表紙に森田常務の揮毫を戴き、カセットには栗橋氏(大宮)が御厚意を寄せられました。此の欄を借りて深く感謝の意を捧げる次第です。(野崎)

非賣品

發行日 昭和廿四年二月十五日

浦和市高砂町二丁目一六二番地  
發行者 埼玉銀行從業員組合

代表者 野崎 敏夫  
印刷者 永田 忠也

東京都中央區銀座西一ノ三  
印刷所 グロリア公業株式會社



貴重書

書庫  
館内用

書庫  
館内用

昭和二十四年一月二十五日印刷

(毎月一回、日發行)

銀 嶺

第一卷

0

埼玉県立図書館



31062622